

下山手遺跡

第6次発掘調査報告書

2014

神戸市教育委員会



1. I 区全県 (西から)



2. S B101全景 (東から)



3. 同上カマド全景 (東から)



(左上)

1. S B 102出土遺物

(右上)

2. 西側カマド東側土器群出土遺物

(左下)

3. S D 104出土遺物

序

今回の調査地の所在する元町は、早くから市街地化が行われてきた地域であり、神戸市の中心地のひとつとなっています。

さらに今回の調査地は、かつて下山手小学校が存在した場所にあたり、地域に暮らす人たちが何世代にもわたって学び舎として親しんできた場所でもあります。こうした環境にある当地において実施した今回の発掘調査では、下山手遺跡においてこれまであまり知られてこなかった、弥生時代や古墳時代などの生活跡がみつかりました。

本書に掲載しました記録は、発掘調査によって得られた大切な資料であり、何より地域に暮らす人びとにとってかけがえのない財産です。今後大いに活用されることが期待されるものであり、本書が自分たちの住む地域への愛着をさらに深める上で、その一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 26 年 3 月
神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市中央区下山手通7丁目1番2号において、平成24年度に発掘調査を実施した下山手遺跡第6次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、店舗建設に伴って神戸市教育委員会が実施した。
3. 現地での調査は、平成24年10月24日～平成25年3月4日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課担当係長丹治康明の指導のもと、同課阿部敬生が担当した。現地調査終了後より平成25年度にかけて神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理及び報告書の作成を行った。
4. 本書に掲載した写真図版のうち現地での遺構写真は、神戸市教育委員会丸山　潔及び調査担当者によるもので、空中写真及びそれに基づく第2遺構面平面図は、(株)ジャスパックによる。また遺物写真については、杉本和樹氏(西大寺フォト)によるものである。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」、神戸市発行の2,500分の1地形図「諫訪山」「神戸駅」を使用した。
6. 本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系第V系(世界測地系)で、標高は東京湾中等潮位(T.P.)で示した。
7. 本書の執筆は、第3章第6節は神戸市教育委員会中村大介が行い、その他の執筆及び編集は阿部が行った。図4周辺の微地形図については、神戸市教育委員会関野　豊の作成による。
8. 発掘調査で出土した遺物及び図面・写真等の記録類は、神戸市教育委員会において保管している。
9. 現地での発掘調査の実施ならびに本書の刊行については、(株)ライフコーポレーション、(株)前田建設工業、(株)松浦興業の協力を得た。

目 次

序

例言

第1章 はじめに ······	1
第1節 調査に至る経緯と経過 ······	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境 ······	2
第3節 既往の調査 ······	5
第2章 調査区の設定 ······	9
第1節 調査区の設定 ······	9
第3章 調査の概要 ······	11
第1節 調査の概要 ······	11
第2節 基本層序 ······	13
第3節 第1遺構面 ······	13
第4節 第2遺構面 ······	21
第5節 第3遺構面 ······	53
第6節 鉄製品・金属製品製作関連遺物 ······	57
第4章 まとめ ······	59
第1節 遺構 ······	59
第2節 遺物 ······	60

挿図目次

図1 下山手遺跡の位置 ······	1	図16 第2遺構面平面図 ······	20
図2 周辺の遺跡 ······	3	図17 S B101 平・断面図 ······	21
図3 下山手遺跡調査地位置図 ······	6	図18 S B101 カマド平・断面図 ······	22
図4 下山手遺跡及び周辺の微地形図 ······	7	図19 S B101 出土遺物実測図 ······	22
図5 調査範囲位置図・調査区割図 ······	9	図20 S B102 平・断面図 ······	23
図6 III-1・2 区南壁土層断面図 ······	11	図21 S B102 出土遺物実測図 ······	24
図7 第1遺構面平面図 ······	12	図22 S B103 平・断面図 ······	25
図8 SK01~04 平・断面図 ······	13	図23 S B103 出土遺物実測図 ······	25
図9 SX01 平・断面図・出土遺物実測図	14	図24 西側カマド同東側土器群平・立・断面図	26
図10 SX02・03 平・断面図 ······	15	図25 西側カマド出土遺物実測図 ······	27
図11 SX03 出土遺物実測図 ······	16	図26 西側カマド東側土器群出土遺物実測図	27
図12 SX04 平・断面図 ······	16	図27 S B111 出土遺物実測図 ······	27
図13 SX04出土遺物実測図 ······	17	図28 S B111 平・断面図 ······	28
図14 SX05・06・08~10 平・断面図	18	図29 S B112 平・断面図 ······	29
図15 第1包含層出土遺物実測図 ······	19	図30 S B113 平・断面図 ······	30

図 31	S B114 平・断面図	31	図 54	S X103 出土遺物実測図	45
図 32	S B112 出土遺物実測図	32	図 55	S X105 出土遺物実測図	45
図 33	S P301 ~ 303 平・断面図	32	図 56	S X106 出土遺物実測図	46
図 34	S B113 出土遺物実測図	32	図 57	S X108 出土遺物実測図	46
図 35	S B114 出土遺物実測図	32	図 58	S X109 平・断面図	46
図 36	S D103 平・断面図	33	図 59	S X109 出土遺物実測図	47
図 37	S D103 出土遺物実測図	33	図 60	S X110 出土遺物実測図	47
図 38	S D104 平・断面図	34	図 61	東西・南北溝状落ち込み平・断面図	48
図 39	S D104 遺物出土状況平・立面図	35	図 62	東西溝状落ち込み出土遺物実測図	48
図 40	S D104 出土遺物実測図	36	図 63	第2遺構面柱穴出土遺物実測図	49
図 41	S D105 出土遺物実測図	37	図 64	第2遺構面下層遺構平面図(1)	50
図 42	S D106 出土遺物実測図	37	図 65	第2遺構面下層遺構平面図(2)	51
図 43	S D105 平・断面図	38	図 66	S P401 出土遺物実測図	51
図 44	S D106 平・断面図	39	図 67	I-2区落与込み(整地土層)出土遺物実測図	51
図 45	S E01 平・断面図	40	図 68	I-3区土器群検出状況平・立面図	51
図 46	S K102 平・断面図	41	図 69	I-3区土器群出土遺物実測図	51
図 47	S K102 出土遺物実測図	41	図 70	第2包含層出土遺物実測図	52
図 48	S K103 平・断面図	41	図 71	S B201 平・断面図	53
図 49	S K103 出土遺物実測図	41	図 72	第3遺構面平面図	54
図 50	S K104 ~ 108 平・断面図	42	図 73	S B201 出土遺物実測図	55
図 51	S K105 出土遺物実測図	43	図 74	第3包含層出土遺物実測図	57
図 52	S X102 平・断面図	43	図 75	鉄製品・金属製品製作関連遺物実測図	58
図 53	S X102 出土遺物実測図	44			

卷頭写真図版目次

図版 1	1. I 区全景(西から) 2. S B101 全景(東から) 3. 同上カマド全景(東から)		図版 2	1. S B102 出土遺物 2. 西側カマド東側土器群出土遺物 3. S D104 出土遺物
------	---	--	------	---

表目次

表 1	下山手遺跡調査一覧	6	表 3	出土土錐一覧	61
表 2	鉄製品・金属製品製作関連遺物一覧	58			

挿図写真目次

写真 1	現地説明会開催風景	10
------	-----------	----

写真図版目次

- 図版 1 I・II区全景（空中写真）
- 図版 2 1. I区第1遺構面全景（東から）
2. I区西半部第1遺構面全景（東から）
- 図版 3 1. III-1・2区第1遺構面全景（北から）
2. 同左（南西から）
3. II-2区南西隅第1遺構面全景（南東から）
4. S K01 土層断面（西から）
5. S K02 土層断面（南から）
6. S K03 土層断面（南西から）
- 図版 4 1. S K04 土層断面（北西から）
2. S X01 土層断面（南西から）
3. S X02No.1 Sec. 土層断面（南東から）
4. S X02No.2 Sec. 土層断面（南東から）
5. S X03No.3 Sec. 土層断面（南東から）
6. S X04 上層土層断面（北東から）
7. S X04 下層土層断面（東から）
8. S X06 土層断面（東から）
- 図版 5 1. I区東半部第2遺構面全景（南西から）
2. I-3区第2遺構面全景（東から）
- 図版 6 1. II-1区第2遺構面全景（北東から）
2. III-1～3区第2遺構面全景（北から）
- 図版 7 1. S B101 全景（南東から）
2. 同上カマド全景（南東から）
3. S B101 東西土層断面（南東から）
- 図版 8 1. S B103 全景（南東から）
2. 西側カマド全景（南東から）
3. 西側カマド東側土器群出土状況（南東から）
- 図版 9 1. S B111 全景（西から）
2. S B112 全景（南から）
3. S B111-P 5 土層断面（北西から）
4. S B111-P 6 土層断面（南東から）
5. S B112-P 2 土層断面（南西から）
6. S B112-P 12 土層断面（西から）
- 図版 10 1. S P160〔S B113〕土層断面（北から）
2. S P165〔S B113〕土層断面（北から）
3. S P184〔S B113〕土層断面（南から）
4. S P188〔S B113〕土層断面（南から）
5. S P288〔S B114〕土層断面（東から）
6. S P292〔S B114〕土層断面（東から）
7. S P301 土層断面（北西から）
8. S P302 土層断面（北西から）
- 図版 11 1. I-1区SD103全景（東から）
2. I-4区SD104全景（南西から）
3. I-2区SD105全景（南東から）
4. I-4区SD106全景（北から）
- 図版 12 1. SD04③区遺物出土状況（北西から）
2. SD04④区遺物出土状況（北から）
3. SE01 土層断面〔断割前〕（南から）
4. SK101 土層断面（東から）
5. SK102 土層断面（南西から）
6. SK103 土層断面（南東から）
7. SK104 土層断面（南西から）
8. SK105 土層断面（南東から）
- 図版 13 1. SK106 土層断面（南から）
2. SK107 土層断面（南東から）
3. SK108 土層断面（南東から）
4. SK109 土層断面（南から）
5. SX102 全景（南西から）
6. 同左粘土検出状況（南西から）
7. SX102 土層断面（南西から）
8. 同左粘土内土層断面（北西から）
- 図版 14 1. SX103 土層断面（南東から）
2. SX104 土層断面（南西から）
3. SX105 土層断面（南西から）
4. SX106 土層断面（南西から）
5. SX107 土層断面（南西から）
6. SX108No.1 Sec. 土層断面（南西から）
7. SX108No.2 Sec. 土層断面（北西から）
8. SX109 土層断面（南西から）
- 図版 15 1. 東西溝落ち込みNo.1土層断面（北東から）
2. 同左No.2 土層断面（北東から）
3. I-2区第2遺構面下層遺物検出状況（南西から）
4. I-3区土器群検出状況（北から）
- 図版 16 1. S B201 全景（北東から）

2. 同上（北西から）
- 図版 17 1. S B201 中央土坑土層断面（西から）
 2. S B201 土層断面（西から）
 3. III-1・2区南壁土層断面（西から）
- 図版 18 1. 第1包含層出土遺物
 2. S B101 カマド出土遺物
 3. S B102 出土遺物（1）
 4. S B102 出土遺物（2）
- 図版 19 1. S B102 出土遺物（3）
 2. S B102 出土遺物（集合）
 3. 西側カマド出土遺物
 4. 西側カマド東側土器群出土遺物（1）
- 図版 20 1. 西側カマド東側土器群出土遺物（2）
 2. 西側カマド東側土器群出土遺物（集合）
 3. SD103 出土遺物（1）
 4. SD105 出土遺物
 5. SD103 出土遺物（2）
- 図版 21 1. SD104 出土遺物
- 図版 22 1. SD106 出土遺物（1）
 2. SD106 出土遺物（2）
 3. SK105 出土遺物
 4. SX102 出土遺物（1）
 5. SX102 出土遺物（2）
 6. SX102 出土遺物（3）
 7. SX102 出土遺物（4）
 8. SX105 出土遺物
 9. SX102 出土遺物（集合）
- 図版 23 1. SX110 出土遺物
 2. SP401 出土遺物
3. 東西溝状落ち込み出土遺物（1）
 4. 東西溝状落ち込み出土遺物（2）
 5. I-2区西北部落ち込み（整地層）
 出土遺物
 6. I-3区土器群出土遺物
- 図版 24 1. 第2包含層出土遺物（集合）
 2. 第2包含層出土須恵器壺蓋〔134〕
 ヘラ記号
 3. SB201 出土遺物（1）
 4. SB201 出土遺物（2）
 5. SB201 出土遺物（3）
- 図版 25 1. SB201 出土遺物（4）
 2. SB201 出土遺物（5）
 3. 第3包含層出土遺物
- 図版 26 1. 第2包含層出土飯蛸壺
 2. 第2包含層出土製塙土器
 3. 出土製塙土器
 4. SX01・03～05 出土土鍤
- 図版 27 1. SX04・05・07 出土瓦
 2. 出土石鎌
 3. 第2包含層出土砥石
 4. 土器底部〔55〕種実圧痕マクロ写真
 (2倍)
- 図版 28 1. 出土鉄製品
 2. 同左X線写真
 3. 出土金属製品製作関連遺物
 4. 同左X線写真

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

下山手遺跡は、神戸市中央区下山手通7丁目、8丁目に所在する、弥生時代～中世の集落遺跡である。当遺跡では、これまでに5次にわたる発掘調査が実施されてきているが、それらの調査は全て今回の調査地よりも南側の同8丁目地区において行われたものである。今回の調査は初めて同7丁目地区において実施したものであり、南側の道路を隔てた地区で実施された第1・3次調査において古墳時代後期の集落跡などが確認されていることから、当該時期の集落が北側にも拡がっている可能性が調査前から想定されていた。

今回の調査は、店舗建設に伴うもので、調査に先立ち平成23年11月8日に試掘調査を実施した結果、遺物包含層などが確認された。さらに同9月27日～10月9日の期間において旧下山手小学校プール解体時に工事立会を実施し、埋蔵文化財の遺存状況を確認した。以上の結果を踏まえて事業者側と協議を行い、建設工事によって地下の埋蔵文化財が影響を受ける部分について発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は当初約1,900m²を対象として開始した。調査の進展に伴って、調査対象地と南側道路との取り付き部分について、工事影響深度内に埋蔵文化財が存在することが新たに判明したため、追加して発掘調査を実施した。調査対象面積合計は約1,950m²となった。追加部分については既存のコンクリート擁壁等が存在していたため、当初対象地区の調査が概ね終了した段階でこれを除去し、その後発掘調査に着手することとなった。擁壁等撤去のため約1週間の中止期間があった。



図1 下山手遺跡の位置

(2) 調査組織

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工楽 善通 大阪府立狹山池博物館館長

和田 晴吾 立命館大学名誉教授（平成25年7月14日まで）

菱田 哲郎 京都市立大学文学部教授（平成25年7月15日から）

教育委員会事務局

平成24年度（現地調査）

教育長	永井 秀憲	教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野 展也	社会教育部長	東野 展也
教育委員会担当部長	安達 宏二	教育委員会担当部長	安達 宏二
(文化財課長事務取扱)		(文化財課長事務取扱)	
埋蔵文化財担当課長	千種 浩	埋蔵文化財担当課長	千種 浩
(埋蔵文化財係長事務取扱)		(埋蔵文化財係長事務取扱)	
文化財専門役	丸山 潔	文化財専門役	丸山 潔
文化財課担当係長	丹治 康明	文化財課担当係長	丹治 康明
	安田 滋		前田 佳久
埋蔵文化財センター担当係長	斎木 巍	埋蔵文化財センター担当係長	斎木 巍
事務担当学芸員	佐伯 二郎	事務担当学芸員	西岡 誠司
	井尻 格		井尻 格
	中谷 正		中谷 正
	小林さやか		
調査担当学芸員	阿部 敬生	報告書作成担当学芸員	阿部 敬生
遺物整理担当学芸員	池田 毅	遺物整理担当学芸員	山口 英正
	内藤 俊哉		藤井 太郎
	藤井 太郎		阿部 功
保存科学担当学芸員	阿部 功		
	中村 大介	保存科学担当学芸員	中村 大介

第2節 遺跡の位置と歴史的環境

下山手遺跡は、六甲山南麓、旧宇治川と旧鯉川に挟まれた段丘上に立地している。現在のところ、当遺跡の範囲は中央区下山手通7・8丁目の一帯の、東西90m、南北130m程度の範囲に広がっているものと考えられている。現標高は、T.P.20m前後を測る。また現在の海岸線までの直線距離は、約800mを測る。

これまでに当遺跡における発掘調査は5回行われているが、調査件数が少なく、また小規模な調査も含まれるため、未だ遺跡の全容解明にはほど遠い状況である。

よって当地域の歴史的な位置づけを行うには未だ資料不足の感が否めないが、周辺地区で行われた発掘調査成果をもとに当遺跡の歴史的環境について考えてみたいと思う。

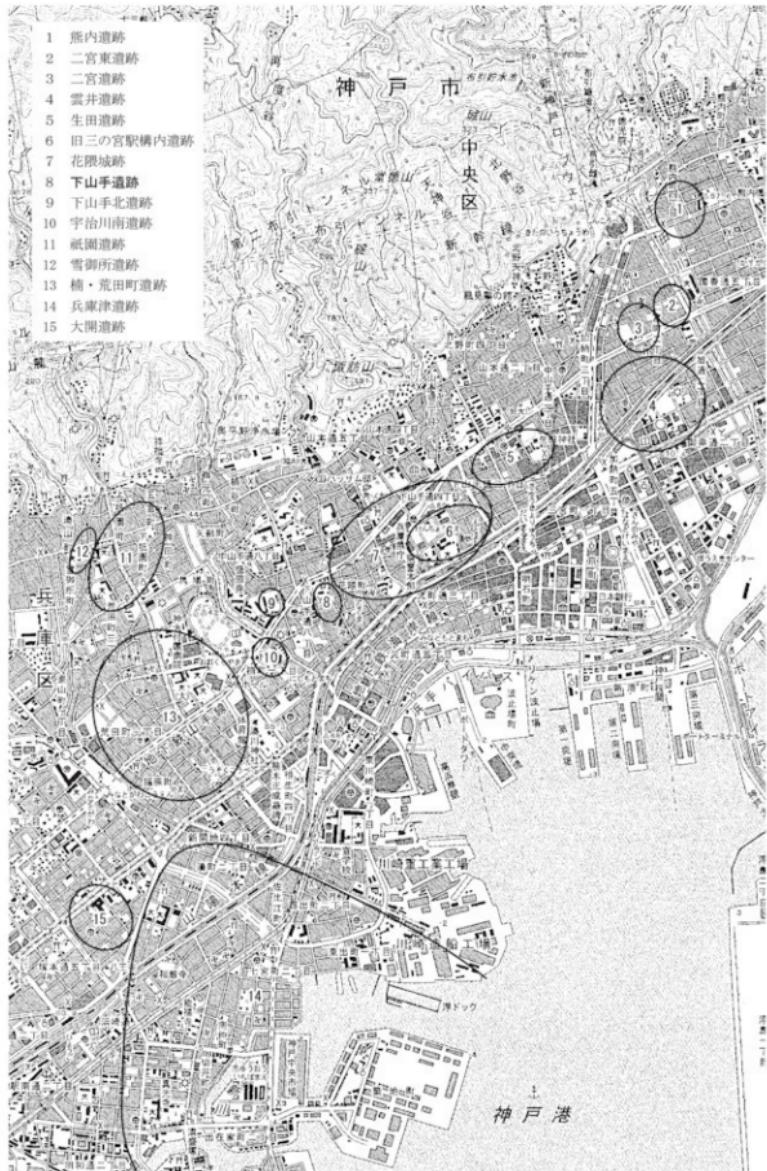


図2 周辺の遺跡 (S=1 : 25,000)

(1) 縄文時代

当遺跡の南西約400mに位置する宇治川南遺跡(図2、10、以下同じ)では、縄文時代早期～晩期の土器が一定量出土している。出土遺物の中には、当該期の東北地方の土器型式のものや、九州産の黒曜石などが含まれており、早い段階から対外交流が認められる。また、当遺跡の北東側約2.7kmに位置する熊内遺跡(1)では早期の大川式の遺物が伴う竪穴建物などが、同2.3km東の二宮東遺跡(2)では同じく早期の神並上層式の土坑、落ち込み、ピットなどが検出されている。また同2.0kmの雲井遺跡(4)でも大川式、神宮寺式、神並上層式の遺構・遺物が検出されている。雲井遺跡(4)における近年の調査では中期末の北白川C式の土器が大量に出土している。東側約1.2kmに位置する生田遺跡(5)では後期後葉頃の土器や、当該時期の「今朝平タイプ」の土偶が出土している。雲井遺跡(4)では晩期の突帯文土器(長原式など)が、南西約2.0kmに位置する大開遺跡(15)では、同じく突帯文土器の滋賀里IV式～船橋式などが出土している。以上のように当遺跡の周辺においては縄文時代の資料が特に近年増加する傾向が認められる。

(2) 弥生時代

大開遺跡(15)では前期の環濠集落が検出されている。また、約1km西及び南西方向に位置する楠・荒田町遺跡(13)で、前期の貯蔵穴や中期の方形周溝墓などの遺構・遺物が検出されている。生田遺跡(5)でも、中期中葉の竪穴建物や中期後葉の方形周溝墓などが確認されている。雲井遺跡(4)では前期末の方形周溝墓や中期後葉の方形周溝墓、玉造り工房などが確認され、玉砥石に転用された武器形青銅器の鋳型が出土し、注目されている。当遺跡の西側に隣接する花限城跡(7)では、中期末の竪穴建物が検出されたほか、流路や谷から同時期の土器が出土し、谷出土土器の中には、魚を描く土器片も含まれる。祇園遺跡(11)でも中期後葉の竪穴建物が検出されている。熊内遺跡(1)では後期の環濠集落が確認され、環濠からガラス玉などが出土している。

(3) 古墳時代

二宮東遺跡(2)では前期に開削された大溝が、祇園遺跡(11)では前期の竪穴建物が検出されている。当遺跡の東側約1.2kmに位置する生田遺跡(5)では、5世紀中頃のカマドをもつ竪穴建物や、6世紀初頭の竪穴建物、掘立柱建物などが確認されている。熊内遺跡(1)では6世紀後半の木棺墓などが検出されている。当遺跡(8)では、後期頃の可能性が考えられる掘立柱建物が確認されている。

(4) 飛鳥時代

当遺跡の西約300mに位置する下山手北遺跡(9)では前期の掘立柱建物などの遺構が検出されている。当遺跡の北東側2.1kmの二宮遺跡(3)でも飛鳥時代の竪穴建物、掘立柱建物、鍛冶炉などが確認されている。鍛冶炉は、湿気よけに溝を周囲に掘り、柱を立てて屋根を葺いた鍛冶炉専用の建物があるという、当該時期のものとしては珍しい構造をもち、鍛冶專業集団の存在が想定されている。

(5) 奈良時代

熊内遺跡(1)では遺物包含層が検出され、銅鏡「神宮開寶」(初鑄765年)が出土している。二宮遺跡(3)では祭祀で供えられた土器や土馬が出土している。当遺跡の西側約700mに位置する旧三の宮駅構内遺跡(6)では掘立柱建物や土坑が検出されている。当遺跡の南西約2kmに広範囲に広がる兵庫津遺跡(14)では、奈良時代に掘削された溝が2条検出されている。

(6) 平安時代

楠・荒田町遺跡(13)では、後期の塹、掘立柱建物が、祇園遺跡(11)でも後期の掘立柱建物、溝、井戸、園池などが確認されている。また吉州窯系の玳玳天小碗や青白磁合子などの遺物が出土しているほか、山城系や播磨系の瓦も出土している。雪御所遺跡(12)では、後期の土器が出土している。以上の3遺跡は、平氏関連遺跡としての重要度が高まりつつある。

(7) 鎌倉時代・室町時代

旧三の宮駅構内遺跡(6)では室町時代の井戸が確認され、掘形内から14世紀後半代の土器が、井戸枠内からは15世紀前半代の土器が出土している。

(8) 安土・桃山時代

花隈城跡(7)では、16世紀後半の自然流路、落ち込みなどが検出され、軒丸瓦、軒平瓦を含む多量の瓦が出土している。

(9) 江戸時代

兵庫津遺跡(14)では、近年の調査例の増加に伴い、町屋などの近世の港町の様相を窺える遺構の検出例が増加しつつあり、膨大な量の出土遺物からも国内各地で生産された陶磁器類や、中国をはじめ海外で生産され、輸入された磁器も多く出土しており、貿易の様相を示す資料として注目されている。また近年の調査では兵庫城の石垣や堀も検出されており、前述の花隈城から部材を運んで築城されたと伝えられる兵庫城の様相も今後次第に明らかになるものと考えられる。兵庫城を含む兵庫津遺跡の調査成果については、『揖州八田郡福原庄兵庫津絵図』(元禄9年[1696年]作成)の精度の高さを裏付けるようなかたちで資料が増加しつつある。

なお、今回の調査対象地は旧下山手小学校跡地にあたっている。同小学校は明治45年に開校され、周辺の小学校とともに統廃合され、山の手小学校開校に際し、平成6年に閉校となっている。また、今回の調査地の南側約240m、西本願寺神戸別院の南側道路は、旧西国街道にあたっている。

第3節 既往の調査

先述のように、当遺跡においてはこれまでに5次にわたる発掘調査が実施されてきている。

第1・3次調査では、掘立柱建物などの遺構が確認されている。掘立柱建物の柱穴から出土した遺物は微細な小片のみであるため詳細な時期決定には困難が伴うようであるが、遺物包含層出土遺物などを考慮すれば、古墳時代後期(6世紀後半)頃のものと考えられそうである。第3次調査で確認されている掘立柱建物のうちの1棟は、2間以上×2間以上の規模をもつ総柱の建物である。別の1棟も総柱建物で、1間以上×2間の規模の建物である。

そのほか第3次調査においては、弥生時代後期後半の遺物が出土した平面形が方形を呈する落ち込みが確認されており、竪穴建物の可能性が考えられている。また遺物包含層からは、弥生時代中期の遺物も出土している。

第2次調査は、中世のものと考えられる土坑、溝、落ち込み、ピットが確認されている。小規模な調査で、出土遺物も小片が多いため、詳細な時期の特定は困難な状況のようである。

第4次調査では、近代頃の暗渠などを検出されたに止まっている。

第5次調査では、鎌倉時代の掘立柱建物の一部や土坑などが確認されている。掘立柱建物は、調査地の西側に延びるようであり、規模は不明である。

以上のように、当遺跡における既存の調査は件数も少なく、また小規模な調査が多いため遺跡全体の様相を把握する上では資料不足の感が否めない。こうした状況のなか実施した今回の調査は2,000m²近い調査面積をもつ大規模な調査であり、さまざまな成果が得られるものとの期待が調査前より予想されていた。

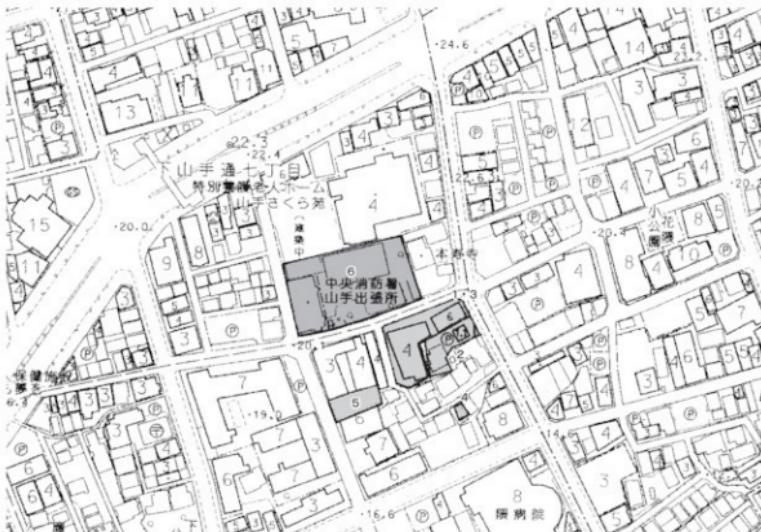


図3 下山手遺跡調査地位置図 (S=1:2,500)

表1 下山手遺跡調査一覧

次数	調査期間	調査地名	調査要因	調査主体	文献
1次	1991.03.15～ 1991.05.31	神戸市中央区下山手通8丁目1、3	共同住宅建設	大手前女子大学	①
2次	1991.04.02～ 1991.04.09	神戸市中央区下山手通8丁目	駐車場建設	神戸市教育委員会	②
3次	2000.04.25～ 2000.05.29	神戸市中央区下山手通8丁目14	共同住宅建設	神戸市教育委員会	③
4次	2001.03.05～ 2001.03.08	神戸市中央区下山手通8丁目5-1	個人住宅建設	神戸市教育委員会	④
5次	2007.04.25～ 2007.05.16	神戸市中央区下山手通8丁目15-5、6、7	共同住宅建設	神戸市教育委員会	⑤
6次	2012.10.24～ 2013.03.04	神戸市中央区下山手通7丁目1-2	店舗建設	神戸市教育委員会	本書

文献

- ① 藤井直正・藤本史子『神戸市・下山手通遺跡』2001大手前大学史学研究所
- ② 池田毅「下山手遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』1994神戸市教育委員会
- ③ 池田毅「下山手遺跡 第3次調査」『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』2003神戸市教育委員会
- ④ 中谷正「下山手遺跡 第4次調査」『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』2003神戸市教育委員会
- ⑤ 川上厚志「下山手遺跡 第5次調査」『平成19年度神戸市埋蔵文化財年報』2010神戸市教育委員会



図4 下山手遺跡及び周辺の微地形図 (S=1:10,000)

主要参考文献

- 1 熊内遺跡
浅岡俊夫編『神戸市中央区熊内遺跡－第2次調査－』六甲山麓遺跡調査会1996
安田憲編『熊内遺跡第3次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2003
- 2 二宮東遺跡
浅谷誠吾『二宮東遺跡第3次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2010
- 3 二宮遺跡
谷正俊「二宮遺跡第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001
- 4 雲井遺跡
丹治康明編『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』神戸市教育委員会1991
安田憲・藤井太郎『雲井遺跡第4次調査』『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
西岡巧次・福島孝行編『雲井遺跡(第8次調査)』神戸市教育委員会1998
- 5 西岡誠司・川上厚志『雲井遺跡第28次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2010
川上厚志『雲井遺跡第33次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2010
口野博史『雲井遺跡第32次調査』『平成22年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2013
- 6 生田遺跡
丸山潔「生田遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1990
中谷正編「生田遺跡第4次発掘調査概要」神戸市教育委員会2006
- 7 旧三の宮駅構内遺跡
菅本宏明・富山直人「旧三宮駅構内遺跡」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1993
菅本宏明・富山直人「旧三宮駅構内遺跡第2次 V・VI区』『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
- 8 花隈城跡
須藤宏「花隈城跡第1次調査」『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2006
山口正英「花隈城跡」『平成18年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2009
- 9 下山手遺跡
本書及び別掲
- 10 下山手北遺跡
須藤宏編「下山手北遺跡第二次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2006
- 11 宇治川南遺跡
丹治康明・野口潔子「宇治川南遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1986
- 12 枝園遺跡
須藤宏「枝園遺跡第2次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1997
口野博史「枝園遺跡第3次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1997
富山直人編「枝園遺跡第5次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2000
内藤俊哉編「枝園遺跡第14次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2013
阿部功編「枝園遺跡第15次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会2013
- 13 雪御所遺跡
山本雅と「雪御所遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1989
- 14 楠・荒田町遺跡
丸山潔・丹治康明「楠・荒田町遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会1980
別府洋二編「楠・荒田町遺跡II」兵庫県教育委員会2008
富山直人編「楠・荒田町遺跡第42・43・46次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2011
- 15 兵庫津遺跡
橋詰清孝「兵庫津遺跡第32次調査」『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2006
黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉編「兵庫津遺跡発掘調査報告書－第14・20・21次調査－」神戸市教育委員会2010
内藤俊哉編「兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2012
神戸市教育委員会「兵庫津遺跡第57次調査－兵庫城跡の調査－」(現地説明会資料) 2012
- 16 大開遺跡
前田佳久編「大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会1993

第2章 調査区の設定

第1節 調査区の設定

第1章第1節でも触れたように、今回の調査対象面積は当初は約1,900m²であったが、追加部部分を含めて計約1,950m²について発掘調査を実施した。

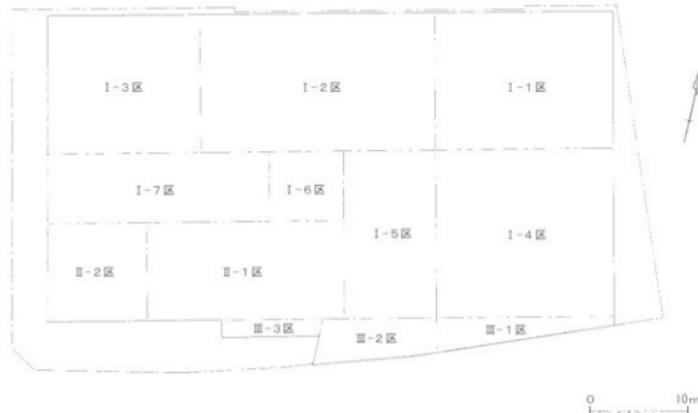
発掘調査着手前に既に上層のすきとり及び搬出が実施されていたが、調査対象面積が広大であり、調査による掘削残土を場内で全て仮置きすることが不可能であったため、対象範囲内を適宜分割して調査を行うこととした。

調査手段階で、対象地の南西部約300m²を残土仮置場とし、掘削残土量を考慮しながら適宜場外搬出する方針であったため、この部分をII区として、それ以外の部分についてI区と呼称して北東部分より調査を開始した。

I、II区とも掘削残土量や調査方針の関係からさらに分割することとし、出土遺物の取り上げ等の便宜を図った。

I区は北東側の調査区をI-1区とし、北半分を西に向かうにしたがってI-2区、I-3区とし、南半分を東から西に向かうに従い、I-4区、I-5区、I-6区、I-7区と呼称した。

II区は東・西に2分割し、東側の調査区をII-1区、西側をII-2区と呼称したが、掘削残土の仮置場との関係から、II-1区の東半を先ず掘削した後、II-2区の掘削を行った。II-2区はI-3区南半、I-7区と同様に、旧下山手小学校のプール設置部分にあたっており、プール設置時あるいは解体時に大きく搅乱・削平を受けており、遺構・遺物ともほとんど遺存していないかった。このためI区全体及びII-2区を同時に空中写真撮影・測量を行い、調査終了後に、II-1区西半部分の掘削を行ったうえで、II-1区全体の調査を実施、その後、改めてII-1区の空中写真撮影・測量を行った。



追加部分はIII区と呼称して調査を実施した。遺物の取り上げ等の便宜を図るため、I-4区の南側部分をIII-1区、I-5区の南側部分をIII-2区、III-2区の西側、南側入り口部分の北側部分をIII-3区として調査を実施した。なお、III-3区部分の南側については、工事影響深度より深い位置に埋蔵文化財が存在するため、掘削及び調査は実施していない。

なお、発掘調査の進展に伴い、古墳時代後期の集落の存在が明らかとなった。I区の調査が概ね終了に近づいた12月22日に現地説明会を開催した。年末に近づいたあわただしい時期ではあったものの、地元住民の関心も高く、約170名の参加があった。参加者の中には旧下山手小学校が他の学校と統廃合されたことにより開校した、山の手小学校に通う児童の生徒の姿もみられ、未来を担う子供たちにも、自分たちの住む町の歴史に触れる良い機会を提供できたものと考えられる。



写真1 現地説明会開催風景

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

発掘調査開始前に既に上層のすき取り及び搬出が実施されており、以下の土層について、遺物掘包含層上面まで重機掘削を行い、遺物包含層以下については人力により掘り下げを行った。なお調査実施により発生する掘削残土についても順次搬出を行うため、当初調査対象範囲のうち南西部部分の約300m²を残土仮置場とし、残りの部分から調査を開始した。先に調査に着手した部分をI区、残土仮置場部分をII区、後に追加した部分をIII区と呼称し、I～III区内をさらに小調査区に分けて遺物取り上げ等の便宜を図った(図3参照)。なお、III区については工事影響深度(T.P.20.491m)までに調査を止めている。

調査区全体において2面の遺構面を確認し、それぞれの遺構面において遺構を検出したほか、I-5・II-1・III-2・3区にまたがる地区的約100m²においてさらに下層でも弥生時代中期の遺構面を確認し、竪穴建物1棟を検出した。その結果、発掘調査延べ面積は約4,000m²となった。

調査区内には多数の擾乱が存在するほか、調査対象地南西部(I-7区・II-1区西半～2区)は近世以降の田圃の造成や旧下山手小学校のプール設置等により大きく削平されており、遺物包含層はほとんど存在せず、遺構もわずかに残存するのみであった。

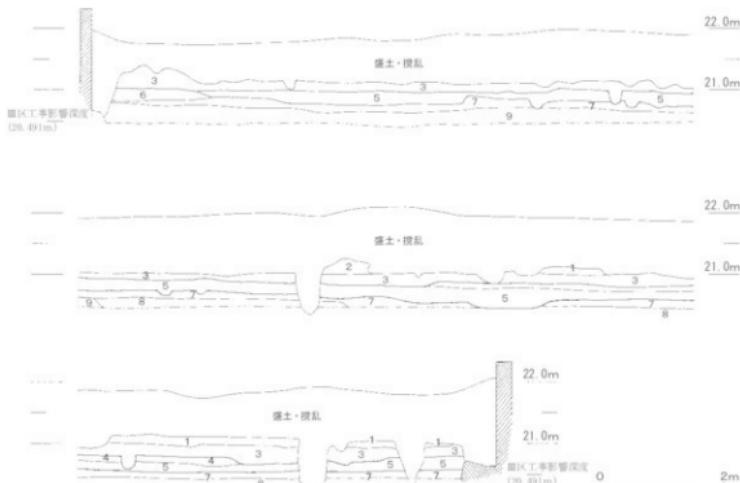


図6 III-1・2区南壁土層断面図



图7 第1道烽燧平面图

第2節 基本層序

調査区北西部(主にI-2区西半)では後述するように整地が行われたようであり、土層の堆積が複雑であるが、その他の地区では概ね以下に述べるような基本層序が認められる。盛土・旧耕土の下層で、調査区北半では淡灰黄色～淡灰(褐)色砂質土、南半では淡(茶)灰色砂質土～茶灰色粘性砂質土の遺物包含層(第1包含層と呼称)が存在し、その下層で第1遺構面を確認した。この第1遺構面の基盤層には弥生時代～奈良時代の遺物が含まれており、この土層を第2包含層と呼称する。第2包含層を除去した段階で第2遺構面を検出した。また、I-5区及びII-1区では第2遺構面の基盤層に弥生時代中期の遺物が多く含まれていた。この層を第3包含層と呼称する。第3包含層の下層で第3遺構面を確認し、弥生時代中期の竪穴建物1棟を検出した。

第3節 第1遺構面

検出した遺構は、土坑、溝、落ち込み、ピット等であり、調査区東半ではあまり多くなく、西半部で主に検出している。

SK01

I-1区で検出した土坑で、平面形は橢円形に近い形状を呈する。長径1.53m、短径1.08m、深さ35cmを測る。土師器片が少量出土しているが、時期については不明である。

[SK01]



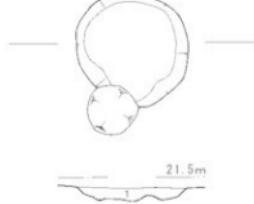
- 1 淡灰(黄)色～淡褐色砂質土
- 2 (淡)褐色～褐色褐色小雜じり砂質土～粘質土

[SK02]



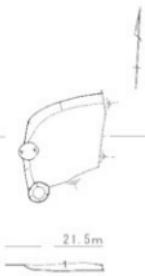
- 1 淡灰黄色砂質土(淡褐色土のブロック巣じる)

[SK03]



- 1 淡灰黄色砂質土

[SK04]



- 1 (褐)灰色砂質土



図8 SK01～04平・断面図

SK02

I-2区で検出した平面形がほぼ円形を呈する土坑である。長径1.15m、短径1.0m、深さ11cmを測る。須恵器、土師器、瓦器が出土している。小片のため詳細な時期は不明であるが、中世の遺構と考えられる。

SK03

I-2区、SK02の南東側で検出した平面形がほぼ円形を呈する土坑である。長径1.2m、短径1.02m、深さ14cmを測り、SK02とほぼ同規模の土坑である。須恵器、土師器が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。

SK04

I-2区で検出した土坑で、平面形は円形ないし方形を呈すると考えられるが、搅乱によって削平されており断定はできない。深さ7cmを測る。須恵器、土師器が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。

S X01

I-4区で検出した落ち込みで、北側の溝状の部分から流れ込んだ水を貯め、南側の溝状の部分から上澄み部分を流す構造であった可能性が考えられる。須恵器、土師器、瓦器、土錐が出土しており、中世の遺構と考えられる。

出土遺物

1は黒色土器A類の椀で、形骸化した高台をもつ。黒化処理は口縁部外面まで及ぶ。口径15.1cm、器高4.3cmを測る。2は瓦器椀で、内面に暗文ミガキが一部残る。口径11.0cmを測る。土錐は、棒状土錐が2点出土している。うち1点(161、写真図版26-4参照)は完形品である。

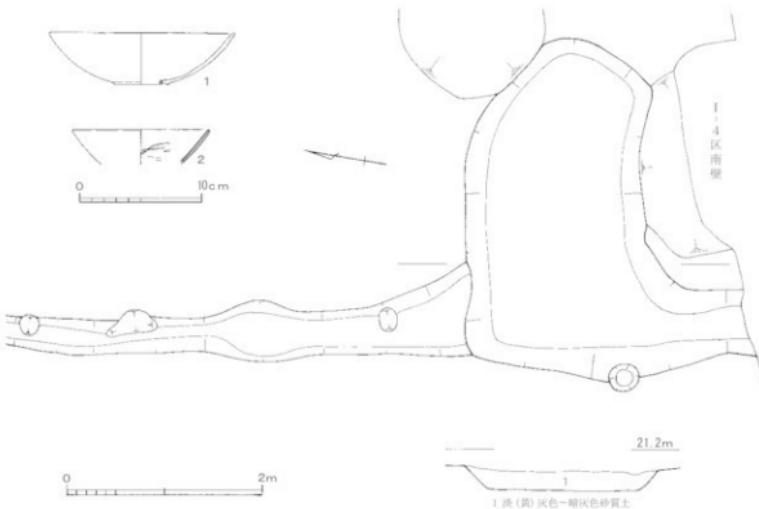


図9 S X01平・断面図・出土遺物実測図

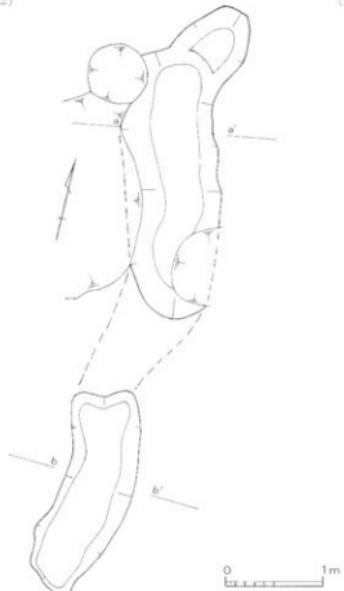
S X02

I-2区で検出した、幅0.7～0.96mを測る溝状の落ち込みで、2ヶ所に分かれて検出したが両者をつなげた全体の長さは6.3mで、深さ10～21cmを測る。須恵器、土師器が出土している。

S X03

I-2区西端で検出した、幅0.7mを測る溝状の落ち込みで、S X02と同様に2ヶ所に分かれて検出したが両者をつなげた全体の長さは10.2mを測る。北側は搅乱や削平によって不明瞭で、調査区外まで延びるかどうかは不明である。また南側は搅乱によって失われており、本来の規模は不明である。深さ5～10cmを測る。須恵器、土師器、土錐、サヌカイト片が出土している。

[SX02]



[SX03]

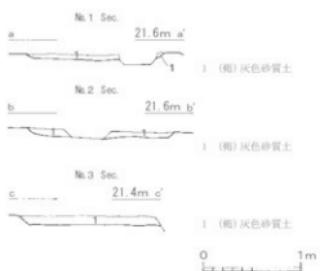
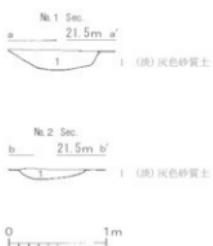
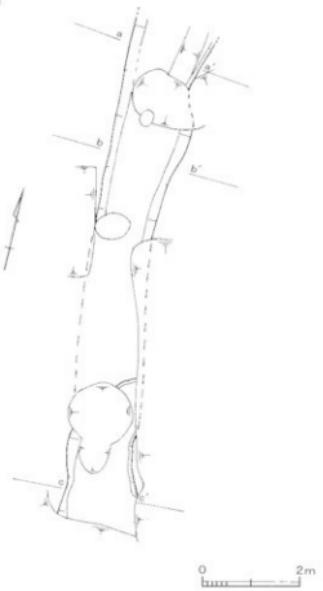


図10 S X02・03平・断面図

出土遺物

3は、土師器の皿で、口径7.5cm、高さ2.85cmを測る。小森俊寛氏による分類皿Nに相当するものと考えられ、15世紀頃のものと考えられる。4は、須恵器の坏身で、口径12.8cmを測る。5は、棒状土錐で、幅1.7cm、厚さ1.35cmを測る。

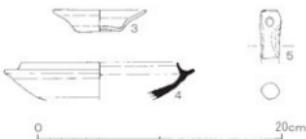


図11 S X03出土遺物実測図

S X04

I - 3区で検出した大型の落ち込みで、長径5.55m、短径4.67m、深さ79cmを測る。平面形は長方形に近いが、搅乱を受けて南東部分等が失われているため、本来の形状は不明である。中世の須恵器、土師器、陶器、磁器、瓦器、瓦質土器、瓦、石器、土錐などが出土している。

出土遺物

15点を図化した。6～10は土師器、11～18は須恵器、19は瓦質土器、20は陶器、21は土錐である。

6は皿で、口径8.2cm、器高2.2cmを測り、見込みにヘラ状工具による記号あるいは文様を施す。完存していないため断定できないが、途切れる部分はあるが円形に近いかたちになるものと考えられる。口縁端部に油が付着しており、油皿として使用されていたものと考えられる。

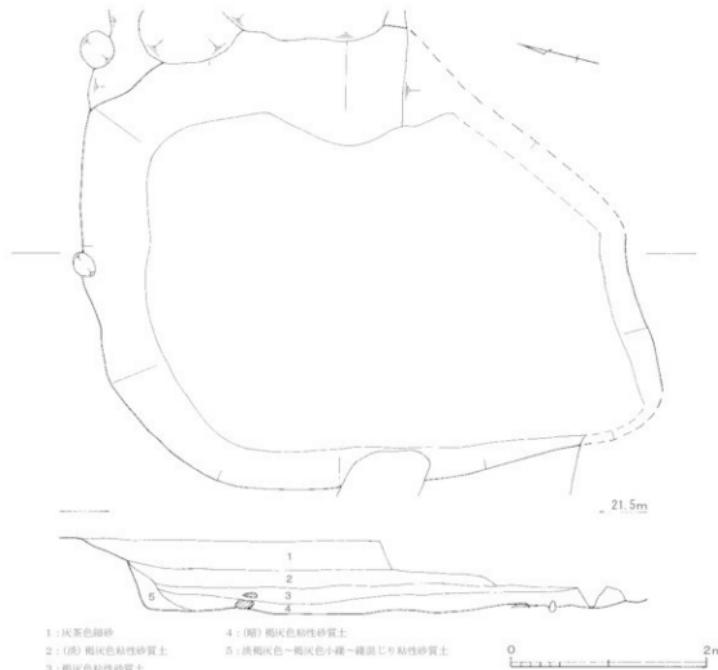


図12 S X04平・断面図

7～10は鍋で、7は口径18.0cm、8は口径18.1cm、9は口径21.0cm、10は口径29.6cmを測る。いずれも体部外面はタタキ、内面はハケあるいは板ナデを施す。口縁部から肩部ないしは体部上半までしか遺存していないため全体の器形は不明であるが、口縁部の特徴などから、岡田章一・長谷川眞両氏による分類の甕形タイプ：播丹型にあたるもので、7は同V類、8・10は同III類、9は同IV類に相当するものと考えられる。14世紀後半～15世紀代のものと考えられる。

11～15はこね鉢で、11は口径26.0cm、12は口径28.1cmを測る。13は小型の鉢で口径17.2cmを測る。14の底径は10.0cm、15は底径9.3cmを測る。11・12は13～14世紀のものと考えられる。

16～18は甕口縁部で、16は口径22.0cm、17は口径26.7cm、18は口径35.2cmを測る。

19は羽釜の口縁部で、外面には強いヨコ方向のナデを施す。口径34.2cmを測る。

20は甕の底部から体部下部である。

21は棒状土錐で、幅1.6cm、厚さ1.3cmを測る。

そのほか、平瓦片が5点出土している(163～167、写真図版27-1参照)。いずれも凹面に布目痕を残す。

以上の出土遺物から判断して、15世紀代の遺構と考えられる。

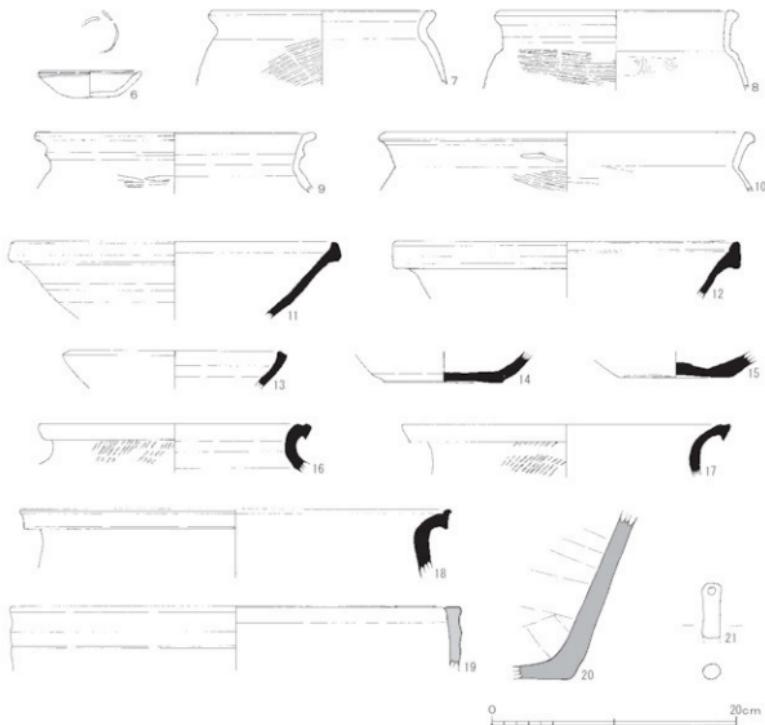


図13 S X04出土遺物実測図

S X05

I-3区、S X04のすぐ西側で検出した土坑状の落ち込みで、長径1.38m、短径0.8m、深さ33cmを測る。中世の須恵器、土師器、灰釉陶器、陶器、瓦質土器、土錐、瓦が出土している。S X04、08、09を切る。

出土遺物

土錐は大型の管状土錐が1点(162、写真図版26-4参照)出土している。また、平瓦片が1点(168、写真図版27-1参照)出土している。凹面に布目痕が残る。

S X06

I-3区、S X05の西側で検出した溝状の落ち込みで、幅0.7~0.8m、深さ15cmを測る。後述するS X09、10を切る。西側は擾乱によって失われている。遺物は出土していない。

S X07

I-7区、調査区西壁際で検出した遺構で、大半が調査区外に延びるため詳細は明らかではないが、検出した状況からは井戸の可能性も考えられる。確認できた規模は、長径2.2m、短径0.4m、深さは33cmを測る。土師器、瓦器、瓦が出土している。中世の遺構と考えられる。

出土遺物

169(写真図版27-1参照)は須恵質の丸瓦で、玉縁部分を残す。凹面に布目痕が残る。

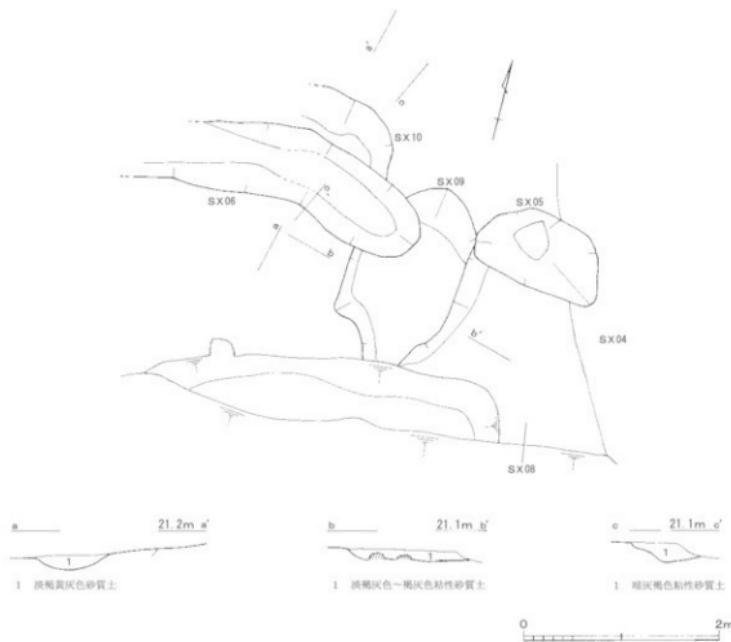


図14 S X05・06・08~10平・断面図

S X08

I-3区西部で検出した落ち込みで、S X04、05に切られ、S X09を切る。南側は搅乱によって失われている。深さ14cmを測る。須恵器、土師器、瓦器が出土しており、中世の遺構と考えられる。

S X09

I-3区西部で検出した溝状を呈する落ち込みで、S X05、06、08に切られる。平面形は梢円形に近いが南西部がやや歪な形を呈している。須恵器、土師器、瓦質土器が出土しており、中世の遺構と考えられる。

S X10

I-3区西部、S X06の北側で検出した落ち込みで、S X06に切られる。西側は搅乱によって失われている。須恵器、土師器が出土しているが小片のため、時期については不明である。

ピット

調査区全体で約50基検出しているが、I-2区でやや密集した状態で確認しているものの全体的には散在している。調査区内において掘立柱建物としてのまとまりを示すものは確認できていない。ピットからの出土遺物は少なく、また小片が多いため図化に耐えうるものが多く、詳細な時期については不明なものが多い。時期の判明する遺物が出土しているものは、S P14から飛鳥時代もしくは奈良時代のものと考えられる土師器壺口縁部が出土している。またS P42から東播系須恵器のこね鉢口縁部が出土している。概ね中世の遺構と考えて大過ないものと思われる。

第1包含層出土遺物

第1包含層からは古墳時代～中世のものと考えられる遺物が出土している。このうち3点を図化した。

22は、土師器壺で、口径13.0cm、高さ2.8cmを測る。内面にはわずかにヘラミガキが認められるが、全面に施されていたかどうかは明らかではない。奈良時代末～平安時代頃のものと考えられる。

23は、須恵器壺の下半部で高台をもつ。高台径は8.9cm、残高6.9cmを測る。平安時代頃のものと考えられる。

24は製塙土器の口縁部で、口径10.7cm、残高6.75cmを測る。内外面ともナデの痕跡を明瞭に残す。山本三郎氏による分類ではIV式B類に該当するものと考えられる。山本氏はこのIV式B類を焼塙土器としている。底部を欠いているが、明石市赤根川遺跡などで出土例が確認されており、尖底を呈するようである。奈良時代後半～平安時代初頭頃に位置づけられている。24は第1遺構面精査中に出土しており、第1遺構面の基盤層である第2包含層からも製塙土器が出土していることや、所属する時期からも本資料も第2包含層中に含まれる遺物である可能性も考えられるが、ここでは第1包含層に伴うものとして報告する。

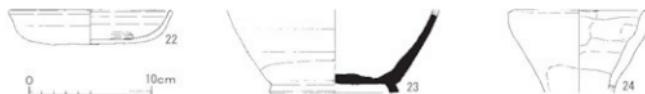


図15 第1包含層出土遺物実測図



圖16 第2遺構平面圖

第4節 第2遺構面

古墳時代後期を中心として、飛鳥時代や奈良時代の遺構を含む遺構面である。調査区内の各所で搅乱を受けているほか、搅乱や削平による影響が大きい調査区西部のI-3・7区やII区、III-3区において遺構の密度が粗いことは第1遺構面と同様であるが、その他の調査区では全域で遺構を確認している。堅穴建物2棟、堅穴建物状落ち込み1基、掘立柱建物4棟、土坑8基、溝9条、落ち込み11ヶ所、柱穴・ピット多数を検出している。

SB101

I-4・5区で検出した堅穴建物で、平面形は方形を呈し、北辺中央にカマドをもつ。4.22m×3.85m、深さ28cmを測る。内部でピットを5基検出しているが、遺存状態が悪く、主柱穴としての断定材料に乏しい。また周壁溝を南壁際東半～東壁際南半にかけての部分で検出している。須恵器、土師器、土錘が出土している。出土遺物から6世紀後半頃の建物と考えられる。

カマド

北壁中央で確認した。須恵器高杯を倒立させて支脚としていたものが遺存している。支脚部分上部には楕などの土師器片数片を載せている。上部に甕を載せて煮炊きを行う際の安定性を調整したものと考えられる。なおこの上部で使用された甕については遺存していなかった。

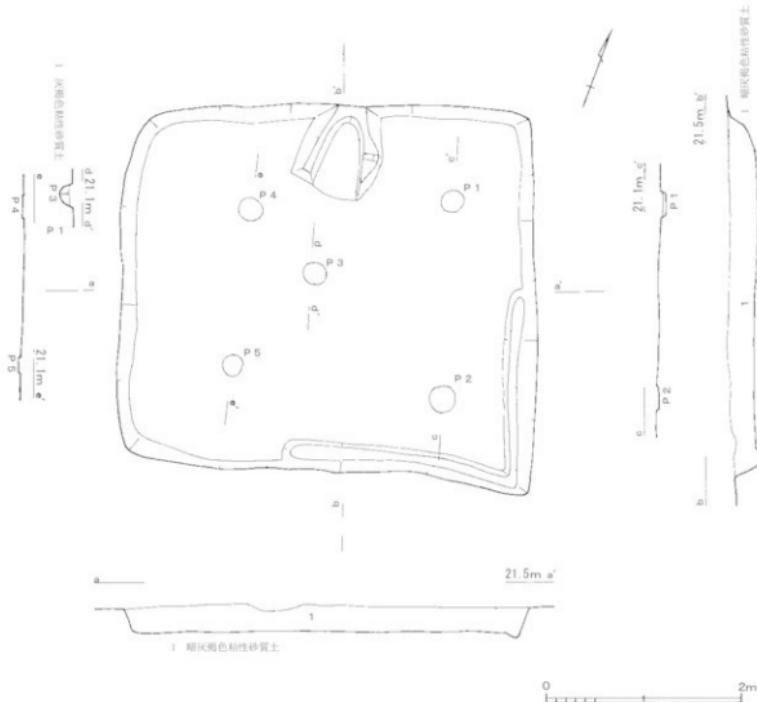


図17 SB101平・断面図

出土遺物

5点を図化した。

25・26はカマド出土土器で、25は前述のとおり支脚に転用されていた須恵器高杯である。脚部下半は大きく欠けている。この欠損部分が、打ち欠きによるものか、支脚として使用される前に欠けていたものか、あるいは使用中に欠けたものかの判断は難しい。出土土器中に欠損部分の破片が認められないため、ここでは打ち欠いた可能性を考慮して図化を行っている。

口径13.2cm、器高8.9cmを測る。脚裾部が内側に折り曲がる形態を呈しており、陶邑窯の製品であれば類例の少ない形態である。他の窯の製品の可能性も考慮する必要があるのかも知れない。杯部の形態からは、陶邑編年(以下同じ)TK10ないしTK43型式に相当するものと考えられ、6世紀後半頃のものと考えられる。

カマドの支脚に転用される場合は土師器高杯を同じように倒立させて使用する例が多いが、本例のように須恵器高杯を用いる例は少ない。当調査においては、後述するようにもう1基カマド(西側カマド)を検出しておらず、25と同様に須恵器高杯を支脚に転用しているが、他の類例としては、市内では、西区吉田南遺跡第17次調査SB204においてTK23～TK47型式に併行する例が確認されている。

26は、25の上部に載せられていた、土師器盤の口縁部～体部上部の破片である。口縁端部は外傾する面をもつ。体部外面はハケ調整を施す。口径26.3cm、残高6.65cmを測る。

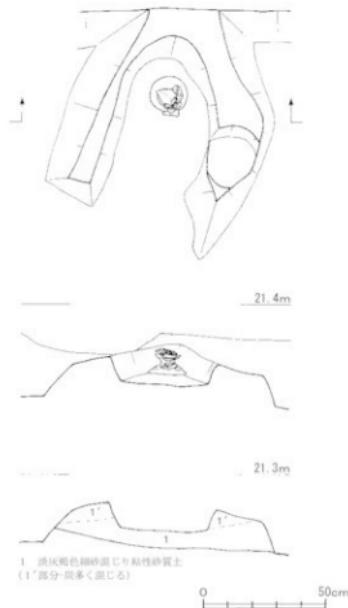


図18 SB101 カマド平・断面・断面見通し図

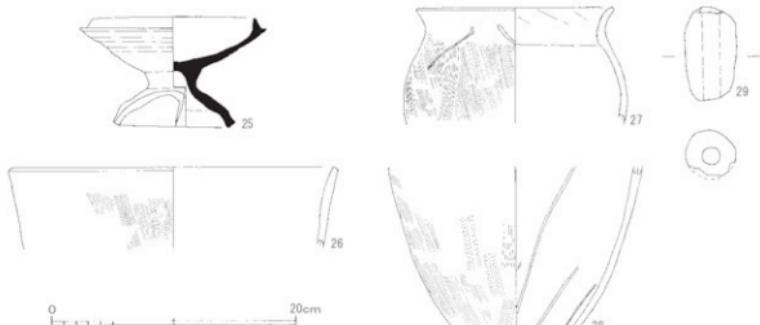


図19 SB101出土遺物実測図

27～29は、埋土中出土遺物である。

27は、土師器甌で、体部外面はハケ調整を施す。頸部付近にハ字状を呈する、ヘラ状工具によるものと考えられる痕跡が認められる。口径16.0cm、残高9.6cmを測る。

28は土師器甌下半部で、外面はハケ調整、内面は板ナデを施す。底部の蒸気孔については有無を含めて不明である。

29是有孔土錐で、長さ7.7cm、幅4.3cmを測る。土錐は計5点出土している。内訳は、有孔土錐3点(29、170、171)、棒状土錐2点(172、173)である(写真図版26-5参照)。

S B102

I-4区で確認した、平面形が長方形を呈する落ち込みで、5.3m×4.45m、深さ23cmを測る。検出当初は、その形状等から堅穴建物としての可能性が考えられたが、周壁構や主柱穴と考えられるピットなどを内部で検出していないことから、堅穴建物としての可能性は低く、落ち込みとして報告する。南側にあたるIII-1区では削平により立ち上がり部分を検出していない。S X104、S P210に西側の一部を切られ、SD106を切っている。須恵器、土師器、弥生土器、土錐が出土している。6世紀後半頃の遺構と考えられる。

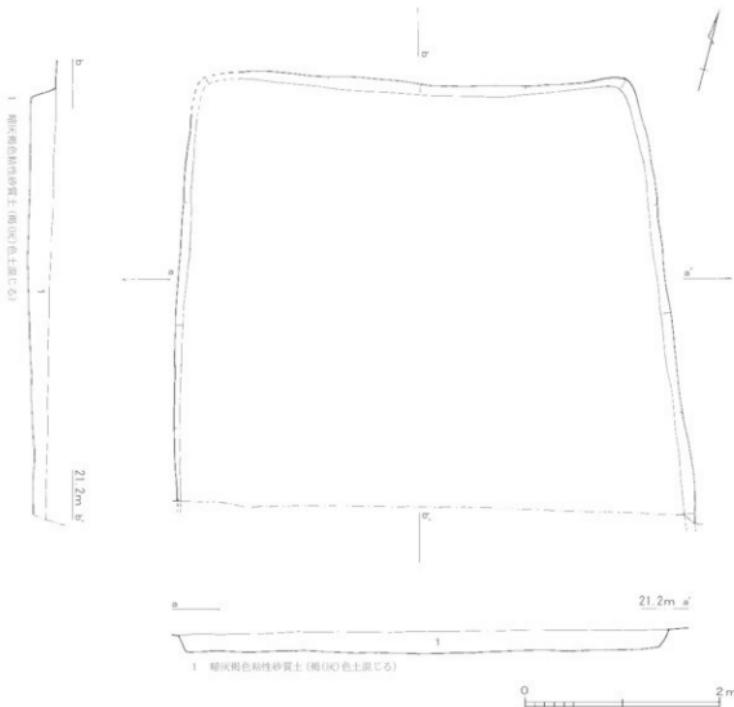


図20 S B102平・断面図

出土遺物

11点を図化した。30～36は須恵器、37～39は土師器、40は土錐である。
30～33は壺蓋で、30は口径13.2cm、残高4.9cm、31は口径13.5cm、残高4.35cm、32は、口径13.6cm、器高4.2cm、33は口径14.7cm、器高4.65cmをそれぞれ測る。

34・35は壺身で、34は口径13.1cm、残高4.9cm、35は口径13.0cm、器高4.2cmを測る。
36は甕で、口径22.3cmを測る。体部外面はタタキのちカキメ、内面には青海波文の当て具痕が残る。

37は壺蓋で、口径12.7cm、器高4.4cmを測る。須恵器壺蓋の技法を真似て製作されているが、轆轤を使用していないよう、ヨコナデやナデによって成形され、ヘラケズリも施していない。また、還元焰焼成もされておらず、赤灰色の色調を呈する。

38・39は甕で、いずれも体部外面はハケ、内面はケズリを施す。38は口径12.75cm、残高9.6cmを測る。39よりもやや大きめのもので、やや粗雑で退化が進んでいる。39は口径12.0cm、器高15.3cmを測る小形の甕で、底部は丸底を呈し、体部は球形に近く、最大径を中位にもつ。口縁部上半が内湾する形態などはやや古手の様相を示す一方で、やや厚手の造りや、体部に比して口縁部がやや長い形状は前期より続く布留系の甕よりも鈍重であり、退化傾向を示す。

40は有孔土錐で、幅3.3cmを測る。SB102からは土錐が5点出土しており、40を除く4点は、棒状土錐である(174～177、図版26-5参照)。

出土須恵器は、TK43型式に相当するものと考えられる。

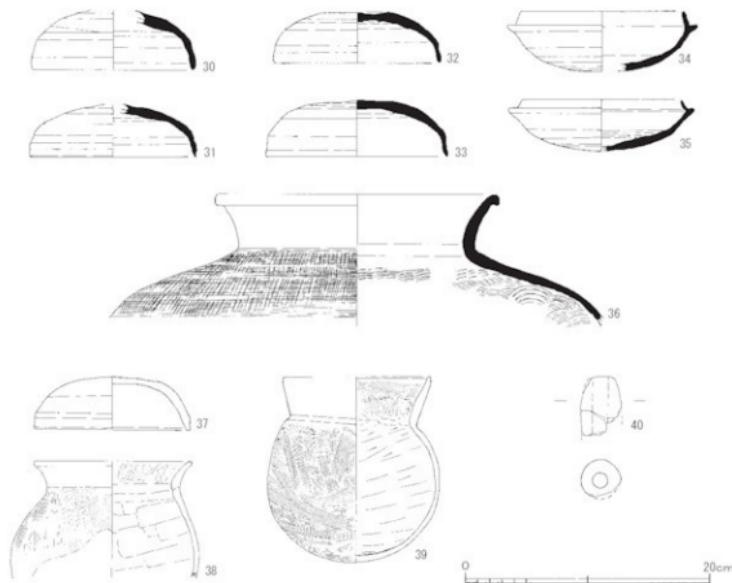


図21 SB102 出土遺物実測図

SB103

II-1区で検出した堅穴建物で、平面形は方形を呈する。4.87m×4.35m、深さ5cmを測る。東辺中央やや南よりで焼土部分を確認し、カマドの可能性も考えられたが断面調査を実施した結果その可能性は低くなった。周壁溝や柱穴は内部で検出していない。SB114と切り合ひ関係があるが、SB103の遺存状態が悪く先後関係は明瞭ではない。遺物からも先後関係は明らかではない。須恵器、土師器、弥生土器、サヌカイト片が出土している。

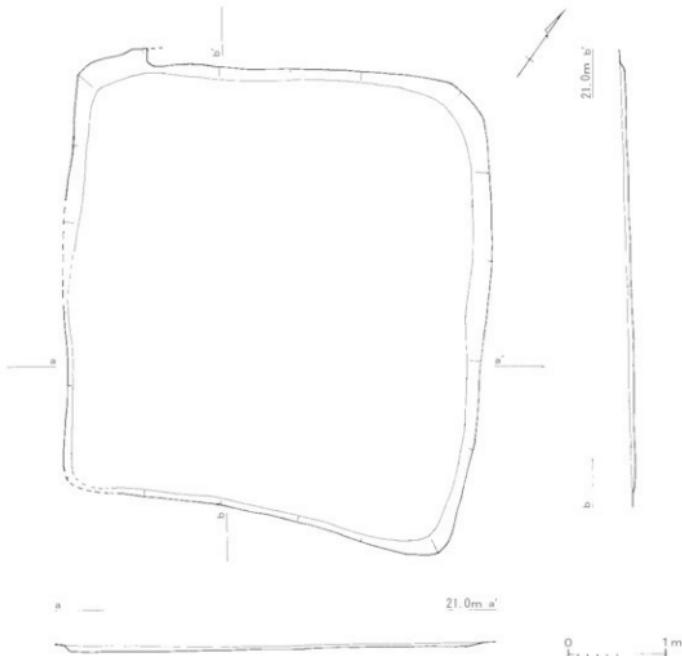


図22 SB103 平・断面図

出土遺物

遺存状態が悪いため、出土遺物も量的に少なく、また小片が多い。2点を図化した。

41は、須恵器壺蓋で、口径13.6cm、残高2.55cmを測る。遺存部分には回転ヘラケズリは施されていない。

42は、須恵器壺身で、口径13.4cm、残高3.8cmを測る。体部外面にヘラ状工具による記号あるいは文様が施されている。遺存部分には回転ヘラケズリは施されていない。

他に小片のため図化していないが内面に暗文状ヘラミガキを施す土師器壺がある。

出土遺物が乏しいが、概ね飛鳥時代頃の建物と考えられる。

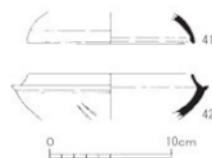


図23 SB103 出土遺物実測図

西側カマド

そのほか堅穴建物に関連する遺構としては、I-2区中央の北壁際でカマドを1基検出している。約1m東側でも焼土が広がる部分を検出しており、当初2基のカマドが近接して存在する可能性を考え、それぞれ西側カマド、東側カマドとして遺物の取り上げや図化等を行った。

東側カマドとしていたものは、その後断割調査を実施したところカマドではなく、焼土が集中していたのみであることが判明した。結果西側カマドとしていたもののみが残るかたちとなつたが、すでに前述のように図化等も行っていたため、そのまま西側カマドの呼称を用いることとする。この西側カマドの東・西両側は南側に落ち込むかたちとなっており、この部分周辺

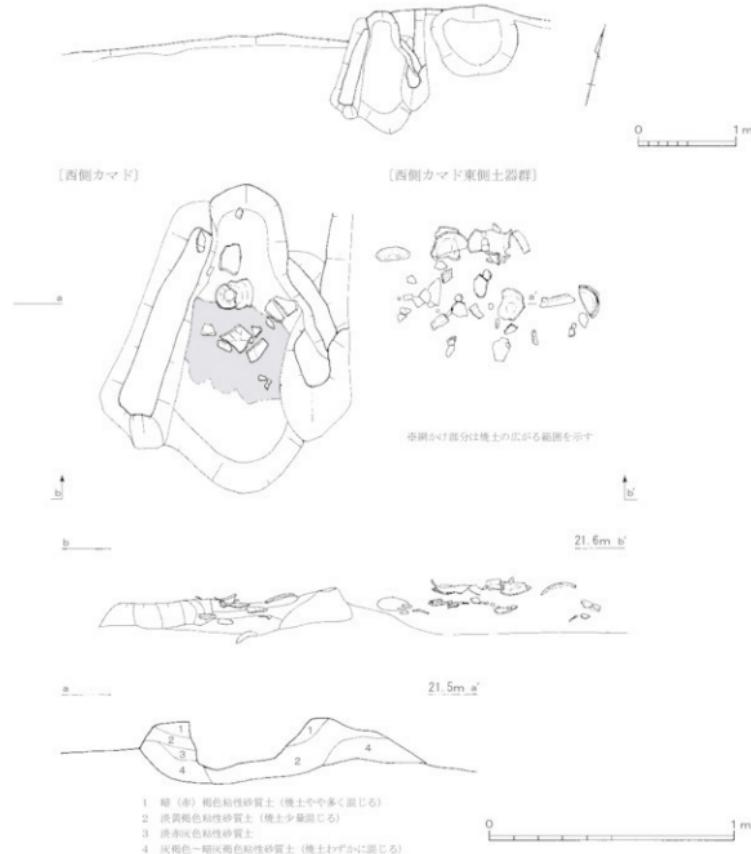


図24 西側カマド・同東側土器群平・立・断面図

が堅穴建物として考えられる範囲ではあるが、後述するようにI-2区北西部は整地が行われたものと考えられ、西側カマド周辺もさまざまな土層が入り混じるようなかたちで堆積しており堅穴建物としての平面プランを明確に把握することができなかった。

西側カマドには、SB101のカマドと同様に、須恵器高壺を倒立させて支脚として使用していたと考えられるものが遺存している。

6世紀後半頃のものと考えられる。

出土遺物

1点を図化した。

43は須恵器高壺で、前述のようにカマドの支脚として用いられていたと考えられるものである。倒立した状態で、焚口からみてやや左側に傾いた状態で出土しており、元位置から若干動いている。壺部が大きく欠損している。この欠損部分が支脚と使用するために意図的に打ち欠いたものか、あるいは支脚に転用するまえに欠損したのかについては明らかではないが、出土状況からは、壺部の欠損部分は左側（低い側）にあたっているため、使用中に破損したものであれば、カマド内にその破片が遺存しているのが自然と考えられる。SB101出土の25と同じく、ここでは打ち欠いた可能性を考慮して図化を行った。口径13.2cm、器高8.7cmを測る。

西側カマド東側土器群

西側カマドの東側で土器がやまとまって出土した。6世紀後半頃のものと考えられ、西側カマドに伴うものである可能性が考えられる。西側カマド東側土器群と呼称する。出土土器のうち6点を図化した。44～47は須恵器、48・49は土師器である。

44は壺蓋で、口径13.5cm、器高4.05cmを測る。45～47は壺身で、45は口径12.1cm、器高3.85cmを測る。46は口径12.5cm、器高4.15cm、47は口径13.7cm、器高4.25cmを測る。

48は甕で、口径12.7cm、残高13.15cmを測る。体部外面はハケ、体部内面は板ナデを施す。

49は鉢で、口径12.8cm、器高9.75cmを測る。下部に径1.8cm程度を測る、円形に近い穿孔を焼成前に穿っている。穿孔部分は丁寧に調整が施されている。外面はハケを施す。

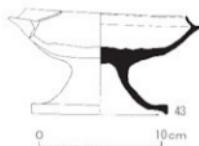


図25 西側カマド出土遺物実測図

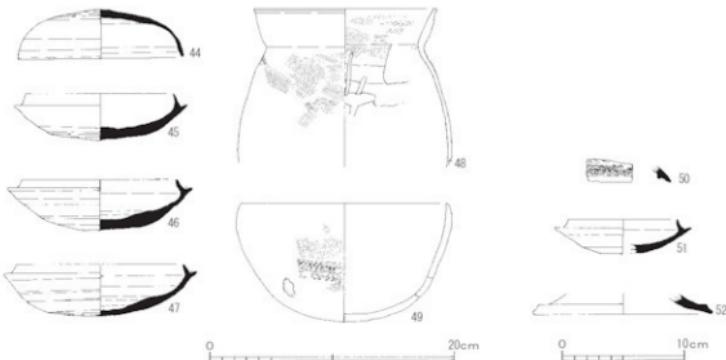


図26 西側カマド東側土器群出土遺物実測図

図27 SB111 出土遺物実測図

SB111

I-4区で検出した2間(3.3m)×3間(3.7m)の掘立柱建物で、側柱建物である。柱間は、梁行(東西)は1.6~1.8m、桁行(南北)は1.1~1.4mを測る。東西建物を構成する柱穴は径45~65cmを測り、深さは20~30cmのものが多いが、P4は45cm、P6は60cmを測る。柱穴内から須恵器、土師器、土錐、サヌカイト片が出土している。棟方向はN-31°-Wを指向する。出土遺物から、飛鳥時代の建物と考えられる。

出土遺物

3点を図化した。50~52はいずれも須恵器で、50は壺蓋、51は壺身、52は高壺と考えられる。50はP2出土のもので、磨耗が激しいが、口縁部外面に波状文の施文が認められる。51はP6掘形内出土のもので、口径8.8cm、器高2.8cmを測る。透かし孔の一部が遺存しているが、小片のため大きさ、個数、方向性などの詳細は不明である。

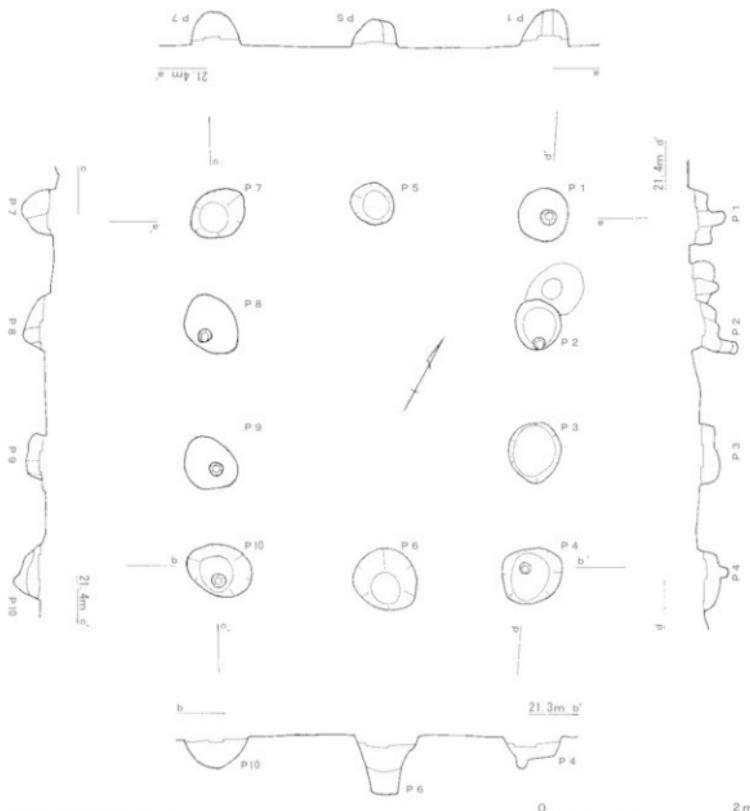


図28 SB111平・断面図

SB112

I-2区で検出した2間(3.4m)以上×3間(4.1m)の掘立柱建物で、総柱建物である。建物は、北側が調査区外に延びている。柱間は、東西方向は1.2~1.5m、南北方向は、1.5~1.9mを測る。建物を構成する柱穴は搅乱により削平されているものもあり、径35~50cm、深さ20~40cmを測る。建物の全容が不明なため棟方向も明らかではないが、東辺の柱列の方向はN-22°-Wを指向する。柱穴内からの出土遺物は少量かつ細片であり、詳細な時期は不明である。

出土遺物

3点を図化した。53・54は須恵器壊身、55は弥生土器である。

53はP2柱底内出土のもので、小片のため口径は不明で、器形(傾き)にも若干の不確定要素がある。54はP2掘形出土のもので、底径は6.2cmを測る。底部付近は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。

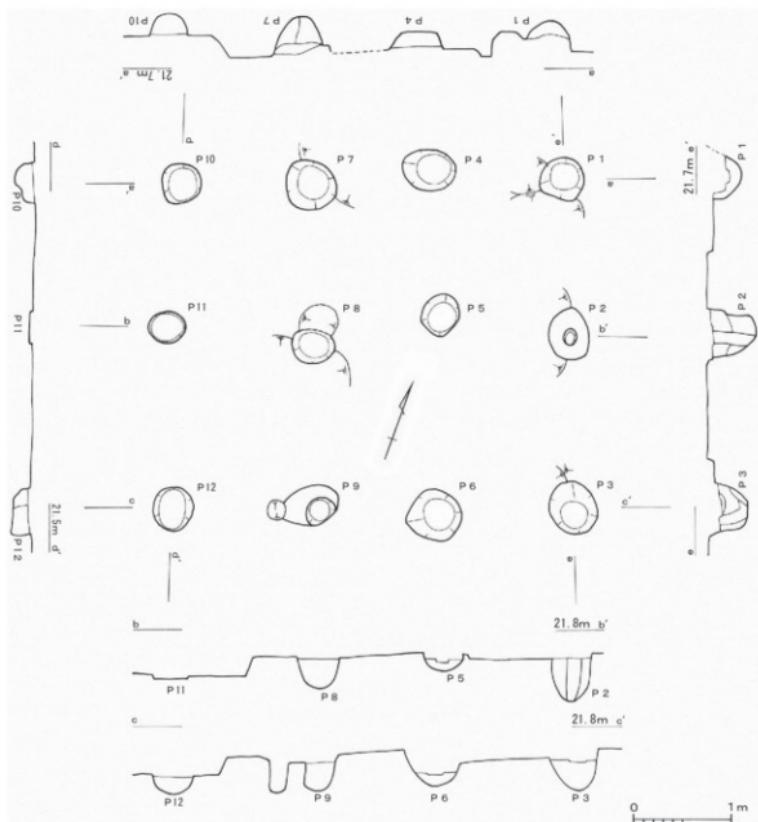


図29 SB112平・断面図

55はP3から出土した甕底部で底径4.9cmを測る。建物よりも古い時期の遺物であるが、底部外面には径6.5～7.5mmを測る種実の圧痕が2個認められるほか纖維状の圧痕が残る。

SB113

I-5区で検出した3間(4.2m)×4間(5.9m)の掘立柱建物で、側柱建物である。柱間は梁行(東西)は1.3～1.5m、桁行(南北)は1.4～1.6mを測る。建物を構成する柱穴は径55～70cm、深さは30～60cmを測る。棟方向はN-30°-Wを指向する。

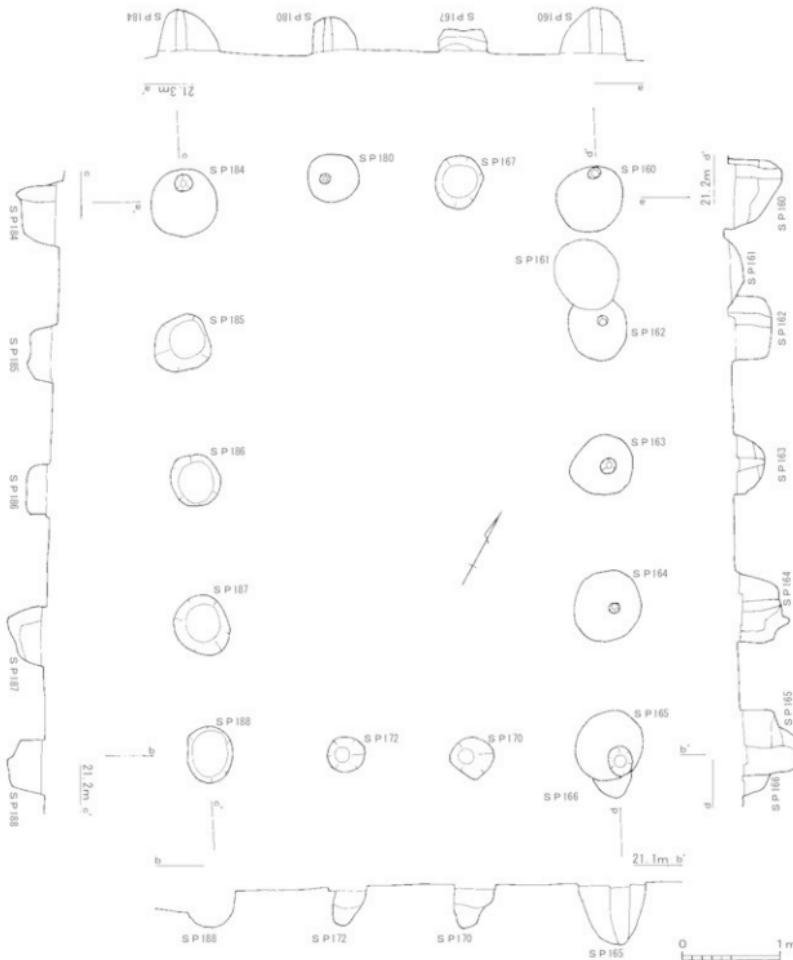


図30 SB113平・断面図

出土遺物

3点を図化した。須恵器蓋及び坏蓋である。6世紀末頃のものと考えられる。

56はS P165出土のもので、口径14.3cm、残高3.5cmを測る。57はS P185出土のもので、口径11.8cm、残高3.9cmを測る。58はS P160出土のもので、口径16.2cm、残高3.1cmを測る。

S B114

II-1区でS B103と重なるかたちで、規則的に並ぶ柱穴を確認した。S B103の北側でも他の遺構とも切り合い関係をもつ数基のピットを検出した。これらのピットを含めて1棟の掘立柱建物を復元した。ただし北西隅の柱穴については、削平の影響によるものか検出していない。

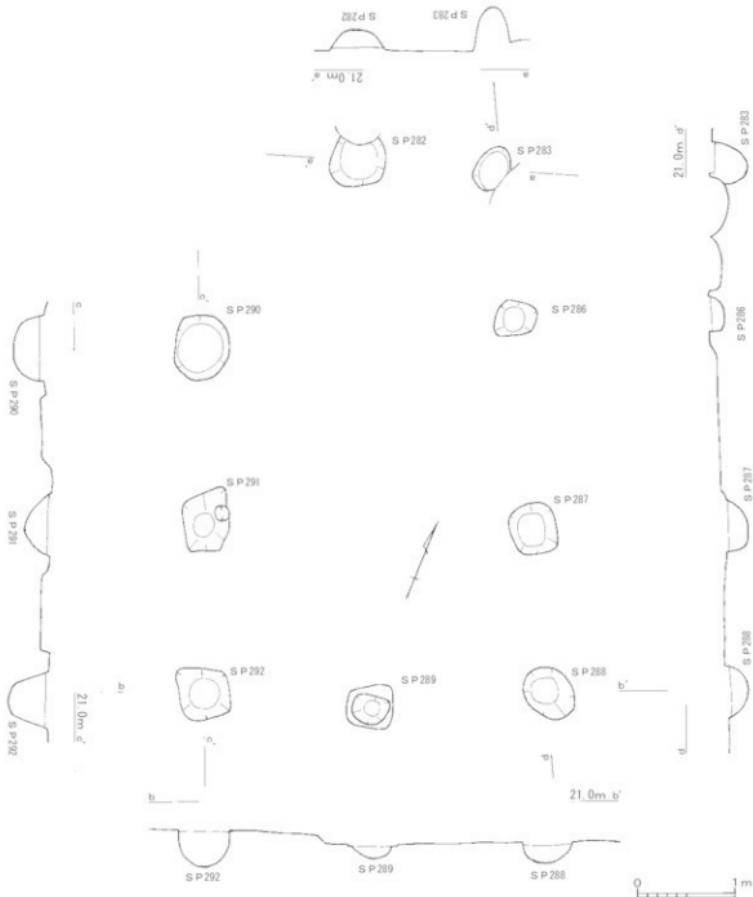


図31 S B114平・断面図

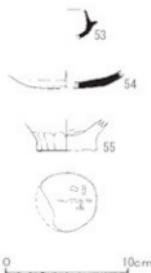


図32 S B112出土遺物実測図

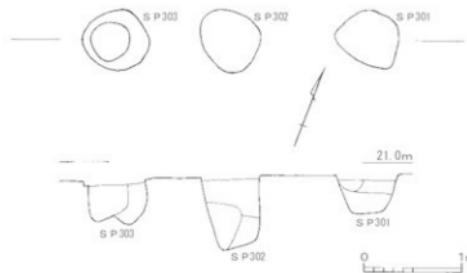


図33 S P301~303平・断面図

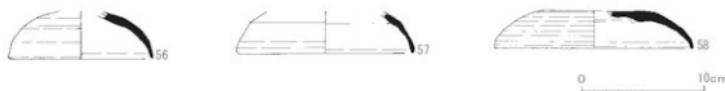


図34 S B113出土遺物実測図

2間(3.5m)×3間(5.5m)の掘立柱建物で、側柱建物である。柱間は、梁行(東西)1.7~1.8m、桁行(南北)1.6~2.2mを測る。棟方向は、N-24°-Wを指向する。

出土遺物

1点を図化した。小片のため、詳細な時期は不明である。

59はS P283出土の須恵器無蓋高壺の壊部と考えられる。口径11.9cmを測る。

S P301~303

III-1区東端部で、ほぼ等間隔(1.2~1.4m)で東西方向に1列に並ぶ3基の柱穴を検出した。東側は搅乱が存在し、さらに東側は調査区外となるため、東側にこの柱列が延びるかどうかについては不明である。また南側は調査区外となるため詳細は不明であるが、調査地南側の道路を挟んだ南側の地区で実施した第1・3次調査において古墳時代後期のものと考えられている掘立柱建物が展開している。以上の状況を考慮すれば柱穴が南側の道路部分まで延びて、掘立柱建物を構成するものとなる可能性が十分考えられる。S P301~303が径約60cmを測る大型の掘形をもつともその可能性を裏付ける要素といえよう。

出土遺物

S P301・302からは土師器、S P303からは須恵器・土師器が出土しているが、小片のため時期については不明である。

SD101

I-1区北東隅部で検出した浅い溝で、幅0.9m、深さ3cmを測る。須恵器、土師器の小片が出土している。

SD102

I-1区、SD101の西側で検出した溝状の落ち込みで、上面の最大幅3.6mを測る。下部では幅1.0m前後で溝状に深くなる部分がある。最深部の深さ26cmを測る。搅乱によって南側は切られているが、搅乱よりも南側には続かないようである。出土遺物は小片で時期は不明である。

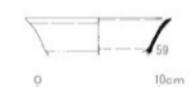


図35 S B114出土遺物実測図

SD103

I-1区で検出した溝である。幅0.6~1.0m、深さ17~30cmを測り、長さ15mを検出している。西側は擾乱によって失われている。さらに西側にはSB112等の遺構が存在するが、この部分には続かず、擾乱の中で終わっているようである。東側も削平の影響もあるが途切れている。東・西両側とも途切れていており、溝状の落ち込みとしたほうが妥当である。6世紀後半～末頃の遺構と考えられる。

出土遺物

5点を図化した。60は土師器、61～63は須恵器である。

60は壺あるいは鍋の把手で、舌状を呈するものである。

61は坏身で、口縁部、天井部とも端部付近の状況は不明である。

62・63は甕で、62は、口径18.0cmを測る。体部外面は縦方向のタタキの後カキメを施す。63は口径50.6cmを測り、口頭部外面に3単位の沈線文帯をもち各沈線文帯間に波状文を施す。

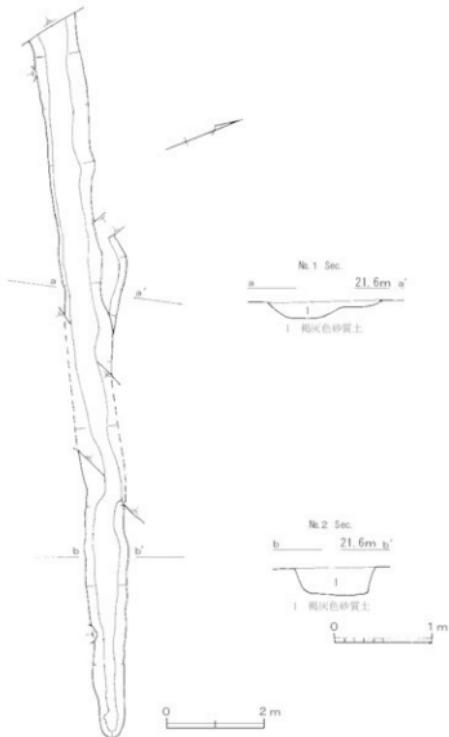


図 36 SD103 平・断面図

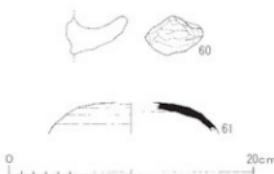


図 37
SD103
出土遺物実測図

SD104

I-4区で検出した溝状の落ち込みである。中央部はSX105に上部を削平されている。ほぼ東西方向に延びるが、西端部の長さ約2.2mは北に振っている。幅48~73cm、深さ28~35cmを測る。西半部では完形の土器が出土しており、特に西端部付近ではまとめて出土している箇所がある。これらの完形の土器等は、底面付近ではなく、遺構検出面に近い上位で確認していることから、ある程度埋まった段階で祭祀等が行われた痕跡を示している可能性も考えられる。

SD103と同様に東・西両側は途切れしており、溝としては機能していないものと考えられる。出土遺物から判断して、6世紀前半～半ば頃の遺構と考えられる。

出土遺物

16点を図化した。

64~74は須恵器、75~79は土師器である。

64~68は壺蓋で、64は口径13.4cm、器高4.3cmを測る。65は口径13.6cm、残高3.8cmを測る。66は口径13.7cm、残高3.75cmを測る。67は口径14.0cm、器高4.0cmを測る。68は口径14.4cm、器高4.7cmを測る。

69は高壺蓋で、天井部に中央が窪むつまみを有する。つまみ径は3.6cmを測る。

70・71は壺身で、70は口径12.0cm、器高3.7cmを測る。底部外面にヘラ記号を施す。71は口径12.2cm、器高3.95cmを測る。

72は器台の脚部と考えられる。外面にカキメを施した後、櫛状工具を縦方向ないしは若干右に傾けて押し当て、列点状に文様を施す。また遺存部分の上部に沈線を1条施す。透かし孔を有しているが、完存していないので大きさは不明である。透かし孔の個数についてもおそらく4個(方向)施されていると考えられるが、遺存部分が少なく、断定できていない。

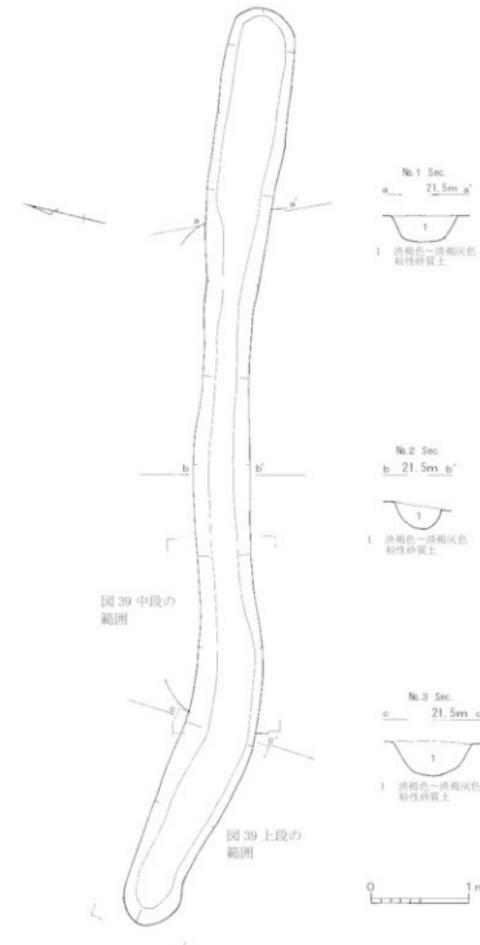


図38 SD104 平・断面図

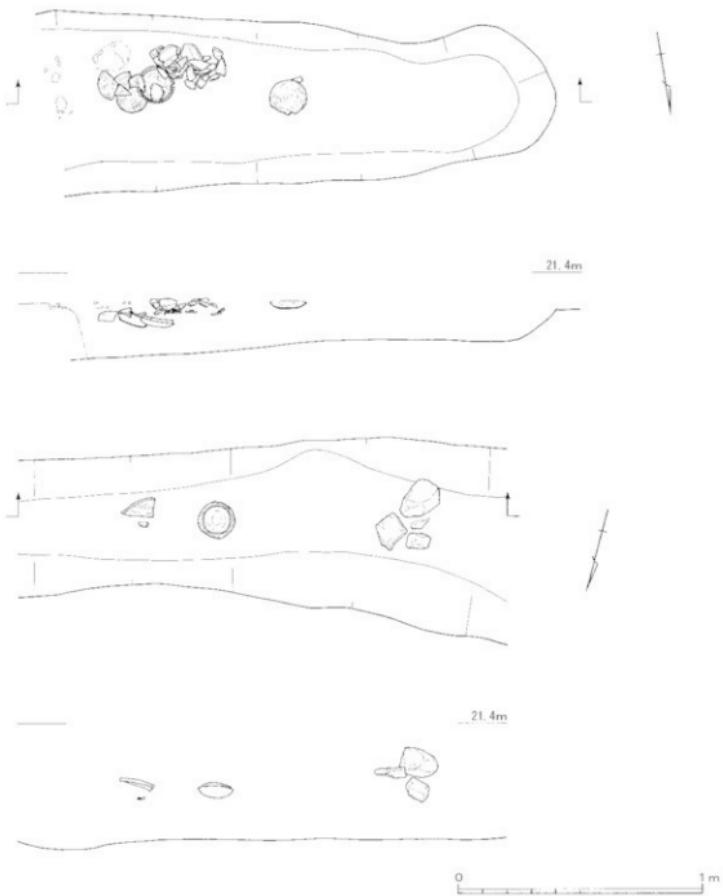


図39 SD 104遺物出土状況平・立面図

73は壺口縁部で口径25.7cmを測る。口縁端部は肥厚気味に丸くおさめる。

74は甕で、口径46.6cmを測る。口頸部の外面は、カキメの後、櫛状工具を押し当てて文様を施す。SD 103出土63と口縁端部の形態など類似点が多いが、74には頸部外面にカキメが施されるが63には認められない。また櫛状工具を押し当てることによる施文が、62は波状文として認めうるものであるのに対し、74は右下方に引き下げるのみで波状を呈するには至っていない感があるなど調整や施文方法に若干の違いが認められ、時期差を示している可能性も考えられる。

75・76は甕で、75は口径19.5cmを測る。76は口径20.9cmを測り、体部最大径をやや上位にもつ。外面及び口縁部内面はハケで、体部内面は板ナデを施す。

77～79は高坏で、77は口径16.8cm、残高4.7cmを測る。坏部が直線的に外方に開く。外面に接合痕を残す。78は口径13.1cm、残高5.4cmを測る。内外面ともハケを施すが、接合痕が残る。厚手のつくりで、口縁端部は丸くおさめる。79は脚部で、脚柱部外面はヘラミガキを施す。脚裾部は屈曲して開くが、下半部が遺存していないため詳細は不明である。

SD105

I-2区西端で検出した溝で、幅40～70cm、深さ30～50cmを測る。ほぼ南北方向に近い方向に流れるが、北端部は屈曲して西に伸びる。北端部は調査区外に延びているようであるが、西端は擾乱を受けているため、さらに屈曲するのかどうかについては不明な点が多い。また、南側は擾乱によって失われており、本来どのあたりまで延びていたのかは不明である。埋土は2層に分かれているが、上層の灰褐色粘性砂質土から遺物が少量出土したほか、上面で完形の須恵器环坏が出土している。古墳時代末～飛鳥時代頃の遺構と考えられる。

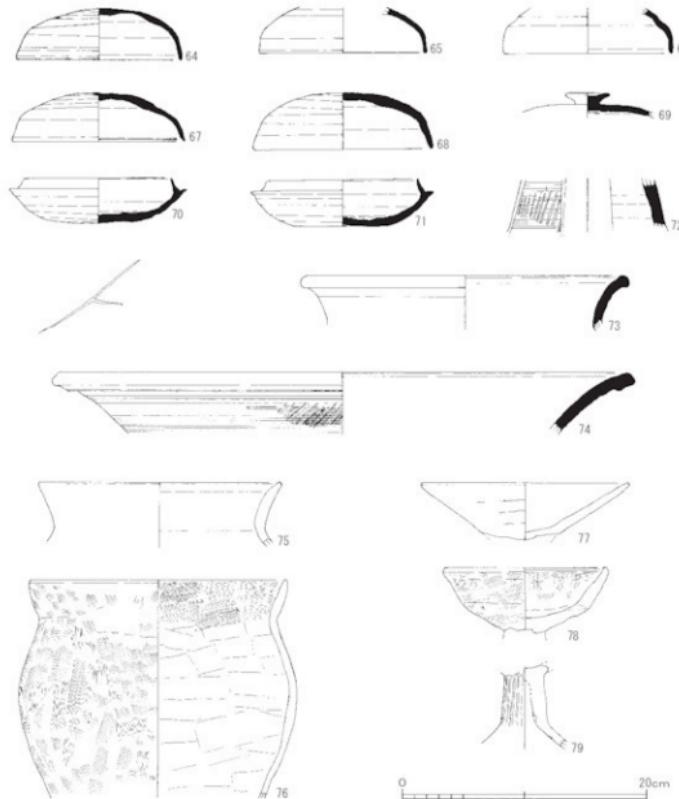


図40 SD104出土遺物実測図

出土遺物

2点を図化した。

SD105は須恵器壺蓋で、口径13.7cm、器高3.15cmを測る。口縁部外面にはハケ状の工具痕跡が認められる。

SD106は土師器塊で、口径11.3cm、器高4.3cmを測る。

SD106

I-4区からIII-1・2区にかけて検出した溝である。(北)東側と(南)西側はともに調査区外に延びている。また中央部はSB102によって上部が削平されている。幅35~85cm、深さ15~30cmを測る。6世紀後半頃の遺構と考えられる。

出土遺物

2点を図化した。

SD105は須恵器壺蓋で、口径15.1cm、器高4.1cmを測る。

SD106は土師器塊で、口径10.9cm、器高4.55cmを測る。螺旋状に粘土紐を積み上げて成形した痕跡が明瞭に残る。

SD107

I-2区西端、SD105の東側で検出した溝で、SD105及び東側のSD108に切られる。幅38~75cmを測る。北端部は一段深くなっている部分があり最深部の深さは22cmを測る。北部は東西方向に流れるが、SD108と重なる部分で屈曲して南側に流れ、南部は削平のため失われているようである。須恵器、土師器が出土しているが、小片のため時期については不明である。

SD108

I-2区西端、SD107の東側で検出した溝で、北側は調査区外に延びる。幅1.08m、深さ10cmを測る。須恵器、土師器、土錐が出土しているが、小片のため時期について不明である。

SD109

III-1区で検出した溝で、北半部はほぼ直線的に南側に流れるが、南半は円弧を描きながら南西方向に流れ、調査区外に延びる。北側はI-4区南端部分で搅乱坑によって失われている。搅乱坑の北側にはSX109が存在するが、その南側では検出していないため、本来搅乱坑までで途切れていた可能性が高い。SD106によって切られている。幅48~67cm、深さ11cmを測る。土師器、鉄滓が出土している。小片のため時期について不明である。

SE01

I-2区の北壁際で検出した井戸と考えられる遺構で、北側は調査区外に延びる。調査区内で検出した範囲はわずかであり、全体の3分の2程度は調査区外に存在するものと考えられる。掘形の平面形は円形を呈するものと考えられ、確認した範囲では直径は約4mを測る。深さについては断面調査を実施し約4mまでは確認できたが、さらに下層については崩落の可能性があり安全面を考慮して掘削を実施しなかったため底面までは確認できていない。また掘形内のやや西よりで井戸枠部分と考えられる幅(直径)40cm程度の土層断面を確認したが、材質などの詳細については不明である。

出土遺物も少量で、また小片が多いため時期については明確ではないが、小片ではあるものの飛鳥時代頃のものと考えられる土師器壺片などが出土しているため、当該時期の遺構と考えておきたい。また周辺の第2遺構面に伴う遺構よりも確実に上位から掘り込まれているため現



図41 SD105出土遺物実測図

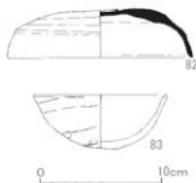


図42 SD106出土遺物実測図

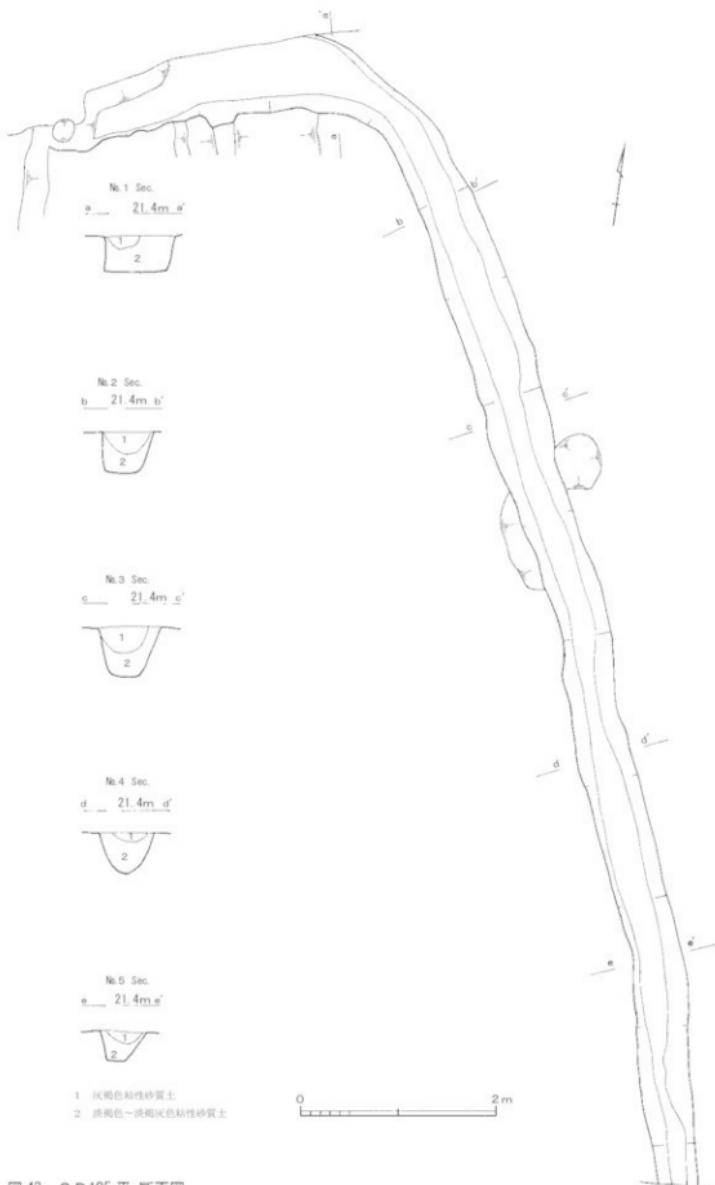


図 43 S D 105 平・断面図

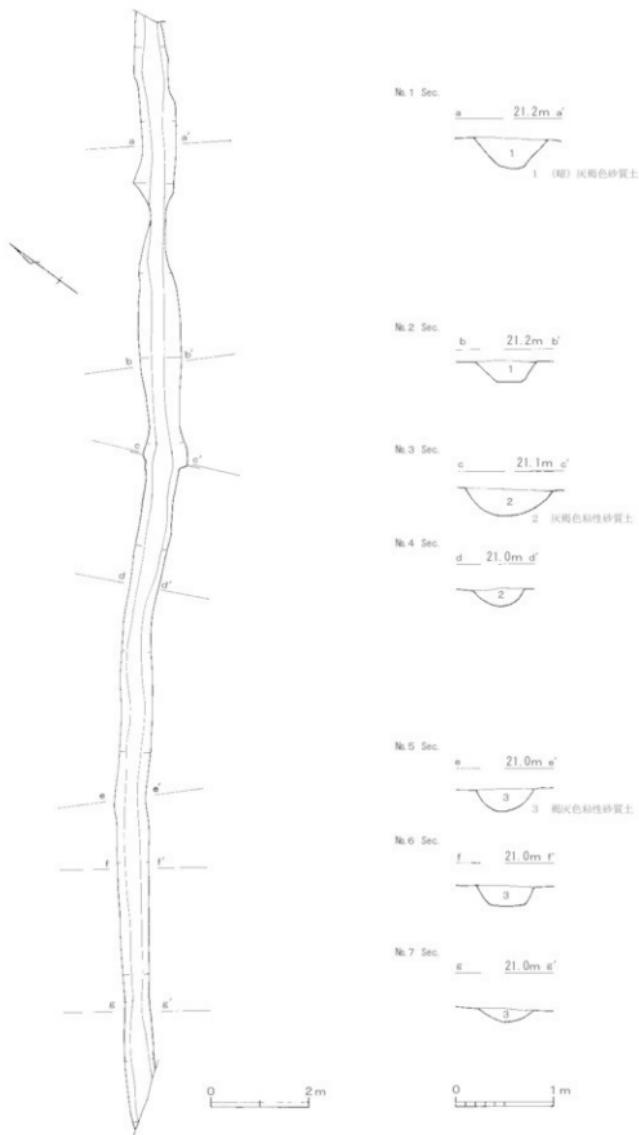


図 44 SD 106 平・断面図

地調査段階では第1遺構面に伴う可能性を考えていたが、後述するように第2遺構面の遺構の検出層位は何度か整地が行われたことによる影響か若干相違があるため、第2遺構面に属する遺構と考えておきたい。

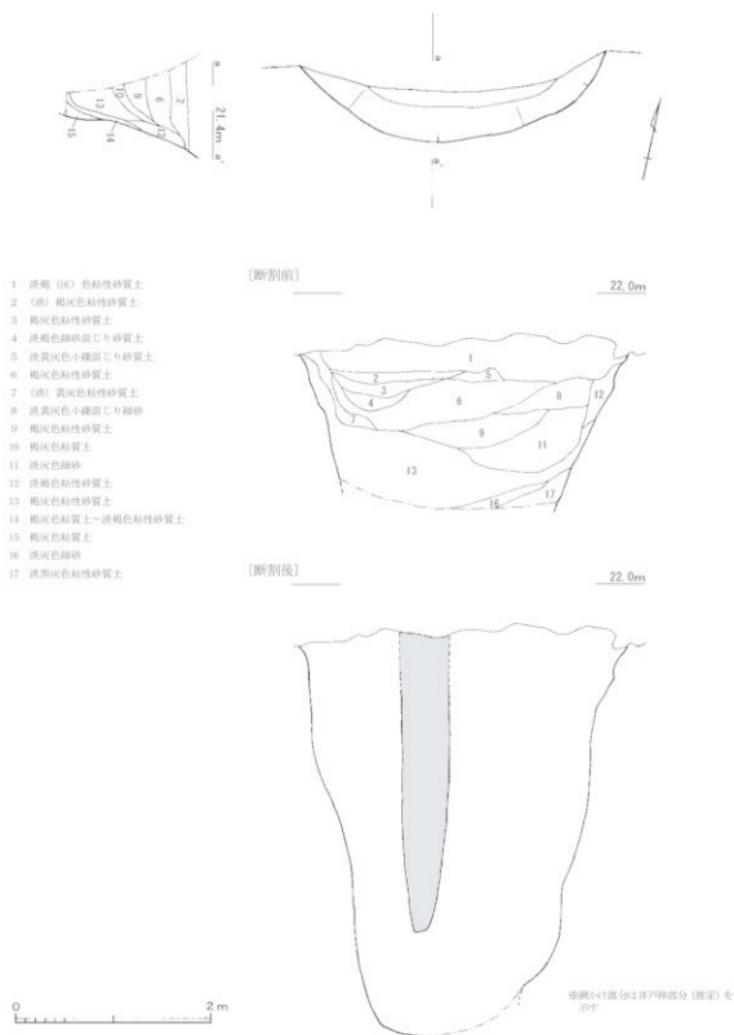


図 45 S E 01 平・断面図

SK101

I-1区北東部で検出した土坑で、東部はSD102によって失われている。本来平面形は椭円形を呈していたものと考えられる。長径0.95cm、短径0.67cm、深さ20cmを測る。弥生土器が出士しており、第3遺構面の遺構である可能性も考えられるが、上部の遺物包含層(第2包含層)には弥生時代～奈良時代頃までの遺物を含み、弥生時代の純粋な遺物包含層ではないことなどから、ここでは第2遺構面の遺構に含めておきたい。

SK102

I-4区で検出した土坑で、西半部分は失われているが、残存する規模から判断すれば、本来は径1.6mの円形に近い平面形を呈するものと考えられる。深さは30cmを測る。出土した土器から判断すれば、飛鳥時代末頃～奈良時代の遺構と考えられる。

出土遺物

1点を図化した。84は、須恵器壺蓋で天井部に低いつまみが付く。つまみ径2.5cmを測る。

SK103

I-2区で検出した土坑で、西半部分は搅乱によって大きく失われている。検出した規模は、長径2.4m、短径1.57m、深さ23cmを測る。本来椭円形に近い平面形を呈するものと考えられる。

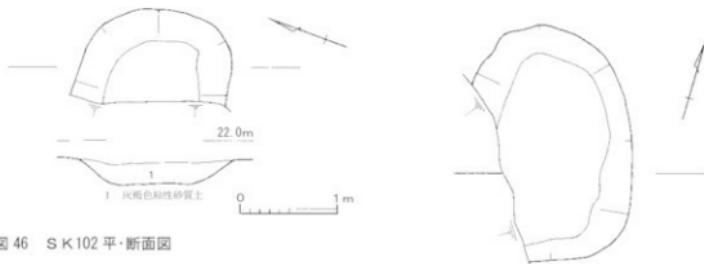


図46 SK102 平・断面図

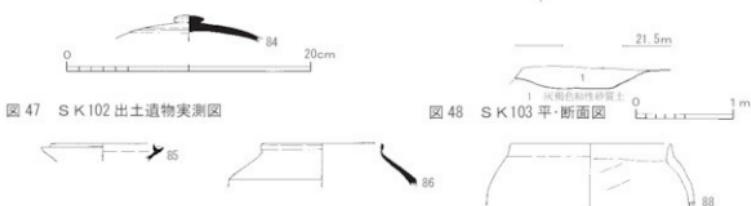


図47 SK102出土遺物実測図

図48 SK103 平・断面図



図49 SK103出土遺物実測図

出土遺物

5点を図化した。

85～87は須恵器、88・89は土師器である。飛鳥時代のものと考えられる。

85は壺身で、口径8.4cmを測る。遺構検出中に出土した。86は短頸壺で、口径9.8cmを測る。

87は瓶の可能性も考えられるがここでは鉢として扱う。口径26.3cm、器高14.95cmを測る。

88は無頸壺で、口径13.0cmを測る。89は甕で、口径17.1cmを測る。

S K104

I-2区北部で検出した土坑で、中央部がピット状に深くなっている。長径1.16m、短径0.98m、深さ43cmを測る。土師器が少量出土している。時期については不明である。

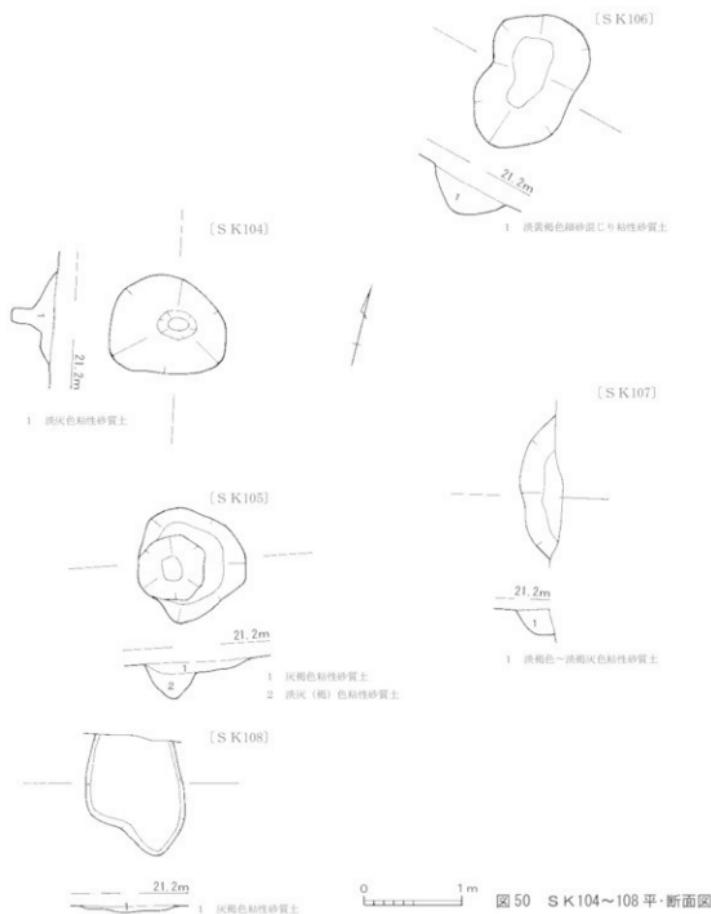


図 50 S K104～108 平・断面図

SK105

I-2区北部で検出した土坑で、長径1.17m、短径1.1m、深さ37cmを測る。須恵器、土師器が出土している。6世紀前半～半ば頃の遺構と考えられる。

出土遺物

1点を図化した。90は須恵器坏身で、口径13.2cm、残高4.3cmを測る。MT15型式に相当するものと考えられる。

SK106

I-2区北部で検出した土坑で、長径1.46m、短径0.98m、深さ30cmを測る。須恵器、土師器が出土している。体部や底部の破片のため、時期については不明である。

SK107

I-2区北部で検出した土坑で、東側は搅乱によって失われている。長径1.47m、短径0.43m、深さ26cmを測る。遺物は出土していない。

SK108

I-2区北部で検出した土坑で、北側は落ち込みによって切られている。長径1.20m、短径1.02m、深さ6cmを測る。出土遺物は小片であり、時期については不明である。



図51 SK105 出土遺物実測図

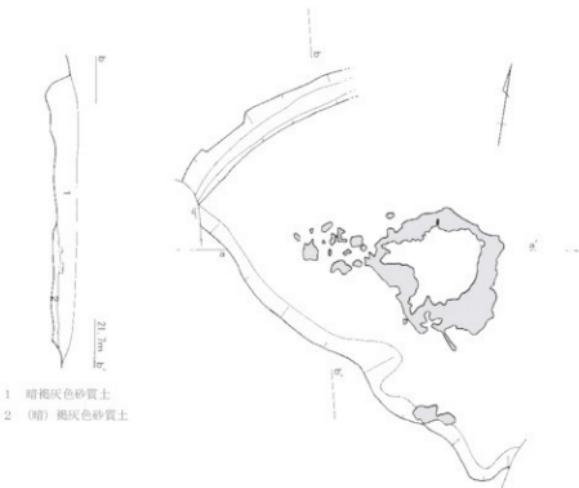


図52 S X102 平・断面図

SK109

I-1区で検出した土坑で、長径1.01m、短径0.77m、深さ20cmを測る。出土遺物はない。

SK110

II-1区で検出した土坑で、長径0.75m、短径0.33m、深さ11cmを測る。出土遺物はない。

S X101

I-1区北東隅で検出した落ち込みで、北・東側が調査区外に延びるため正確な形状や規模は不明である。調査区内での規模は、長径3.35m、短径2.75m、深さ35cmを測る。

須恵器、土師器、土錐が出土しているが、小片のため時期については不明である。

S X102

I-1区で検出した落ち込みで、深さは30cmを測る。内部で円形に近い形で巡る粘土を確認している。須恵器、土師器、土錐が出土している。飛鳥時代の遺構と考えられる。

出土遺物

13点を図化した。91~96は須恵器、97~103は土師器である。

91~93は壺蓋で、91は口径10.0cm、器高2.9cmを測る。92は、口径10.3cm、残高3.25cmを測る。

93は口径10.35cm、器高3.5cmを測る。

94は壺身で、口径9.2cm、残高2.85cmを測る。

95は高环壺部と思われる。口径9.0cm、残高2.4cmを測る。口縁端部の形状が通常の壺部と異なるが、立ち上がりが退化したものとの評価も可能かもしれない。

96は塊で、口径11.0cm、残高9.15cmを測る。底部の形態は不明である。体部中央からやや下がった、最大径が位置するところに沈線を1条施す。内傾気味にたちあがる体部から口縁部はゆるやかに外反して端部は直口気味に仕上げる。体部下部の外面には回転ヘラケズリを施す。

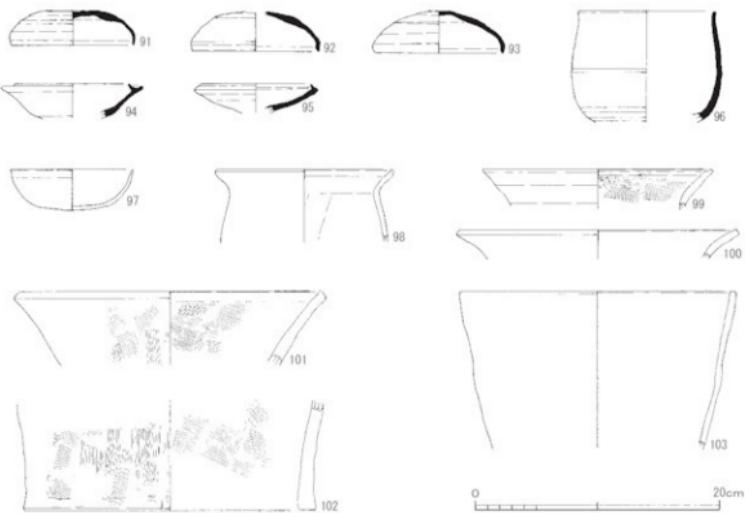


図 53 S X102 出土遺物実測図

97は壇で、口径9.8cm、器高3.4cmを測る。

98～101は甕で、98は口径18.6cmを測る。口縁部内面にハケを施す。99は口径14.3cmを測り、口縁部は頸部から外方に開くが、端部は内湾しておさめる。100は、口径22.5cmを測る。101は口径24.6cmを測る。

102は竈の底部と考えられる。底径21.1cmを測る。

103は甕で、口径22.2cmを測る。

S X 103

I-4区東端で検出した落ち込みで、深さは33cmを測る。6世紀半ば頃の遺構と考えられる。

出土遺物

1点を図化した。

104は須恵器坏身で、口縁端部を欠く。残高4.05cmを測る。

S X 104

I-4区で検出した浅い落ち込みで、S B102を切っている。深さ10cmを測る。須恵器、土師器、弥生土器、土錐が出土しているが、小片のため時期は不明である。I-4区調査段階においては、南肩部はIII-1区に存在するものと考えられたが、III-1区では判然とせず、削平等により失われたものと考えられる。検出した規模は、長径2.8m、短径1.48m、深さ11cmを測る。

S X 105

I-4区で検出した落ち込みで、SD104を切っている。長径5.38m、短径5.34m、深さ10cmを測る。須恵器、土師器、土錐が出土したほか、埋土中には焼土が含まれていた。正方形に近い平面形を呈しているため当初は堅穴建物としての可能性も考えられたが、内部で柱穴が検出していないことや削平のため遺存状態が悪いため、可能性は低い。出土遺物から7世紀初頭頃のものと考えられる。

出土遺物

5点を図化した。105～108は須恵器、109は土師器である。

105は蓋で、口径10.2cm、器高4.3cmを測る。106は坏身で、口径10.6cm、残高3.5cmを測る。

107は低脚高杯の脚部で、残高4.3cmを測る。108は甕で、口径14.2cm、残高6.3cmを測る。通常の須恵器と調整方法は同様であるが、用いた粘土の質によるものかあるいは焼成状況によるものか、淡黄橙色の色調を呈している。口縁部外面にカキメを施した後、金属?工具による記号あるいは文様を施す。この記号あるいは文様と考えられるものは、部分的に施されたものと考えられるが、遺存部分が少ないため断定はできない。またその意味するものは不明である。

109は甕で、口径16.1cmを測る。磨耗及び被熱により調整は不明である。



図54 S X 103出土遺物実測図

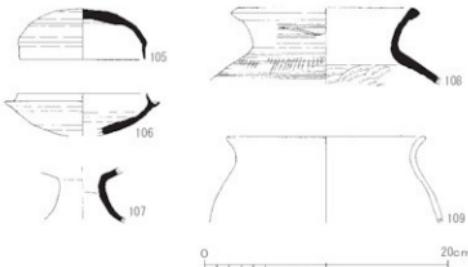


図55 S X 105出土遺物実測図

SX106

I-4区、SX105の北側で検出した落ち込みで、平面形は隅丸長方形に近い。長径3.2m、短径2.04m、深さ10cmを測る。出土遺物から6世紀半ば～後半頃の遺構と考えられるが、弥生時代の大型の石礫も1点(182、図版27-2参照)出土している。

出土遺物

2点を図化した。

110は、須恵器蓋で、口径10.6cm、残高4.3cmを測る。

111は、須恵器坏身で、口径12.7cm、残高4.0cmを測る。

SX107～109

I-4・5区、III-2区において、切り合い関係をもつ不定形の落ち込みを数基確認した。

SX107は、平面形がやや歪な隅丸長方形を呈し、長径3.85m、短径3.35m、深さ17cmを測る。須恵器、土師器、土錐、サスカイトが出土している。SX108を切っている。



図56 SX106出土遺物実測図

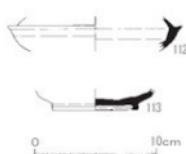
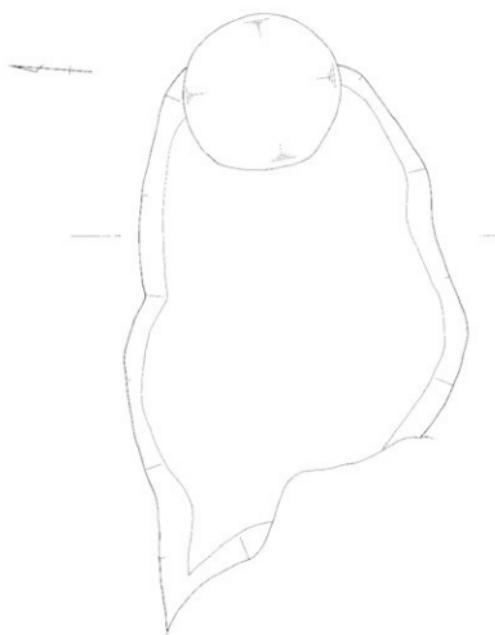


図57 SX108出土遺物実測図



1 頬 (R) 色粘性粘質土
1' 深K (青) 色粘性粘質土

図58 SX109平・断面図





図59 SX109出土遺物実測図

SX108は中央部が長方形に近い土坑状を呈し、北および南東側に溝が取り付くような平面形を呈している。第1遭構面SX01と同様に北側から水を取り込んで、土坑状部分に一旦貯めた後上澄み分の余水を南東側に排水する機能をもつものとも考えられるが、南東側の溝は削平によるものか現状では途切れしており詳細は不明である。SX107に切られ、SX109を切っている。須恵器、土師器、鉄製品が出土している。深さは、土坑部分が21cm、溝部分が8cmを測る。

出土遺物

2点を図化した。いずれも須恵器である。

112は壺身で口縁端部及び底部を欠く。残高2.85cmを測る。

113は高台付き壺で、高台径5.8cmを測る。飛鳥時代～奈良時代のものと考えられる

SX109は、東端は近代の井戸によって失われており、西側はSX108に切られ、SX108よりも西側には広がらないようである。長径5.64m、短径3.5m、深さ20cmを測る。

出土遺物

4点を図化した。いずれも須恵器である。飛鳥時代頃のものと考えられる。

114は壺身で口径10.6cm、残高2.6cmを測る。115は壺で、小片のため口径は不明である。また高台の有無についても不明である。残高3.8cmを測る。116は無蓋高壺の壺部と考えられる。口径13.2cm、残高2.45cmを測る。117は壺口縁部である。残高5.9cmを測る。

SX110

III-1区で検出した土坑状の落ち込みで、南側は調査区外に延びるため本来の規模や形状は不明である。長径2.56m、短径1.35m、深さ8cmを測る。

須恵器、土師器が出土している。

出土遺物

1点を図化した。

118は、須恵器の台付壺の下半部で、高台上端付近に穿孔を施す。残存部の状況から判断すればやや歪ながら穿孔は4方向から施されているものと考えられる。

口縁～体部上半が遺存していないため全体の器形については不明であるが、類例として、神戸市北区に所在する宅原遺跡岡下地区の昭和60年度の調査において出土例がある。同遺跡出土例も口縁部欠くが、体部は遺存しており、体部上部に最大径をもつ。この最大径部分(肩部)に沈線をもつ。この土器を含む大溝下層出土土器については、飛鳥時代中頃のものと想定されている。本例も他の出土遺物も合わせて考えると同様の時期のものと判断される。

東西溝状落ち込み・南北溝状落ち込み

I-2区北東部において、切り合うようなかたちで、幅1.1m前後で、東西方向に伸びるものと、南北方向に伸びるもの、2条の溝状の落ち込みを検出した。

この2条については、東西溝状落ち込みの中央部で切り合っているようであるが、北側では東西溝状落ち

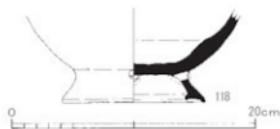


図60 SX110出土遺物実測図

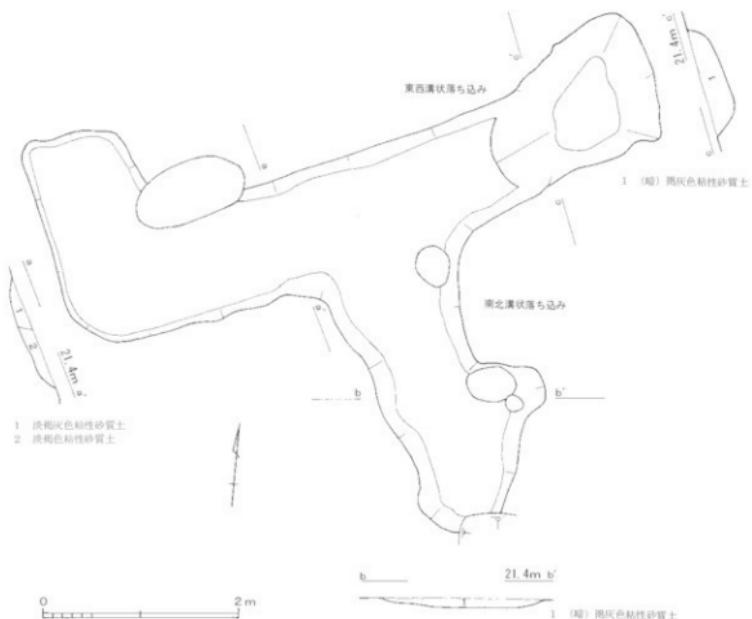


図61 東西・南北溝状落ち込み平・断面図

込みが南北溝状落ち込みを切っているようななかたちで検出できたものの、南側では両者の先後関係は判然としなかった。本来同一の遺構であった可能性も捨てきれない。ともに端部が途切れる傾向にあるため溝状の落ち込みとしている。

東西溝状落ち込みは、ほぼまっすぐに伸びるが、西端部は北側に屈曲して伸びる。また東端は深くなっている。深さは西部や中央部では13cmを測り、東端部は最深部で40cmを測る。6世紀半ば～後半頃の遺構と考えられる。

南北溝状落ち込みもほぼまっすぐに伸び、南端部付近でやや膨らむ部分がある。北側で検出している落ち込み内にも底部付近で、この溝状落ち込みに続くようななかたちで溝状に窪む部分が伸びていることから、本来調査区の北側から伸びていたものと考えられる。深さは13cmを測る。

出土遺物

東西溝状落ち込み出土遺物を2点図化した。

119は、須恵器壺蓋で、口径10.7cm、器高3.65cmを測る。

120は土師器甕で、口径14.6cm、器高13.7cmを測る。底部は平底気味で、底径6.5cmを測る。体部外面はハケ、内面はナデを施す。平底指向の形態からは韓式系軟質土器の影響も考えられるのではないか。



図62 東西溝状落ち込み
出土遺物実測図

柱穴・ピット

第2遺構面では約300基の柱穴、ピットを検出している。一部については、掘立柱建物してのまとまりを確認したが、そのほかには掘立柱建物をしての復元はできない。

出土遺物

6点を図化した。

121～124は須恵器、125・

126は土師器である。

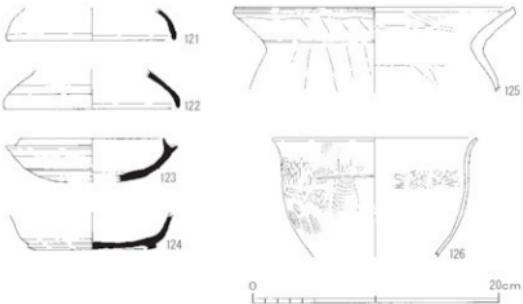


図63 第2遺構面柱穴出土遺物実測図

121はS P117出土の壺蓋で、口径13.6cmを測る。122はS P129出土の壺蓋で、口径14.2cmを測る。123はS P196出土の壺身で、口径11.6cm、残高3.6cmを測る。124は高台の付く壺で、高台径9.0cmを測る。

125はS P152出土の甕で、口径22.5cmを測る。内外面とも板ナデを施す。126はS P270出土の甕で、口径16.4cmを測る。内外面ともにハケを施す。

その他の遺構

特にI-2区北西部において顕著な傾向であるが、第2遺構面の基礎層にかなりの量の古墳時代以降の遺物が含まれており、基礎層には、不定形な平面形をしたいくつかの単位が認められ、また複雑に切り合っていた。この単位をそれぞれ遺構として捉えることも不可能ではなかったが、現状に即して考えればやはり整地の結果さまざまな土層が混じり合っているものと考えたほうが妥当といえる。結果としてさまざまなかたちの落ち込みとしてあらわすこととなつたI-2区北西部の状況は以上の結果によるものである。

またこの整地層と考えられる土層を掘り下げた結果、I-2区の北東部、I-4区S B102の内部、I-5区の地区において、複数の土坑や柱穴を確認した(図64・65参照)。これらの遺構から出土した遺物は細片が多いため詳細な時期を限定することには困難が伴うが、第2遺構面で検出した遺構から出土するものと大差ない時期のものと考えられる。このような状況は、何度も整地が繰り返された結果もたらされたものと考えられる。以下、第2遺構面下層検出遺構と呼称してこれらの遺構や整地層出土の遺物について下に掲げ、若干の記述を行う。

SP401

I-4区、S B102の床面をさらに掘り下げた段階でピットを確認した。位置的な関係などからS B102に伴うものではないと考えられる。長径66cm、短径45cm、深さ16cmを測り、平面形は梢円形を呈する。西側にS P402が存在する。

出土遺物

127は土師器甕で、口径14.2cm、残高6.5cmを測る。体部外面はハケ、内面は板ナデを施す。

I-2区北西部落ち込み(整地層)出土遺物

I-2区北西部で確認した整地土層出土土器のうち2点を図化した。

128は土師器壺で、口径11.7cm、残高4.1cmを測る。

129は製塩土器で、残高8.3cmを測る。外面はハケ、内面は板ナデを施す。

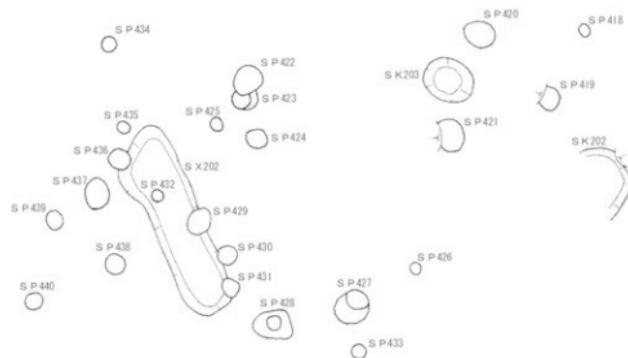
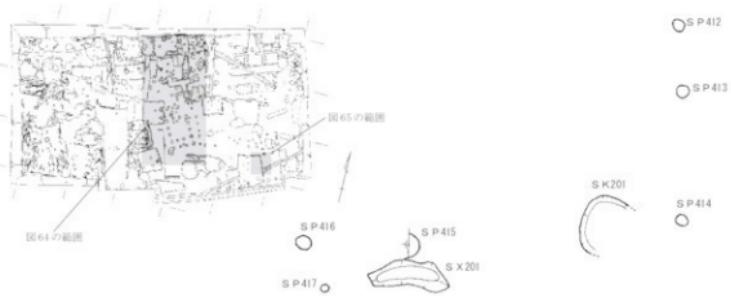


図64 第2造構面下層造構平面図(1)



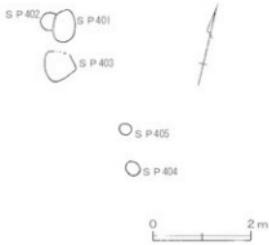


図65 第2遺構面下層造構平面図(2)



図66 SP401出土遺物実測図



図67 I-2区落ち込み(整地土層)出土遺物実測図

第2包含層出土遺物

第2包含層からは弥生時代～飛鳥時代、奈良時代までの遺物が出土している。I-3区において、土器がそのままつぶれたような状態で出土した箇所がある(I-3区土器群と呼称する)。図69にこの土器群を掲げ、図70にその他の包含層出土土器を掲げて記述を行う。

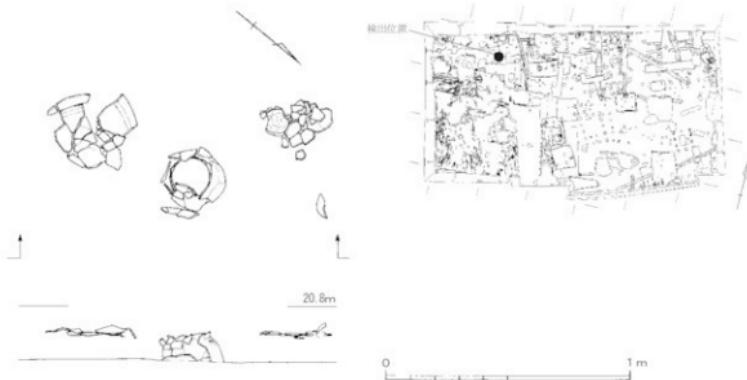


図68 I-3区土器群検出状況平・立面図

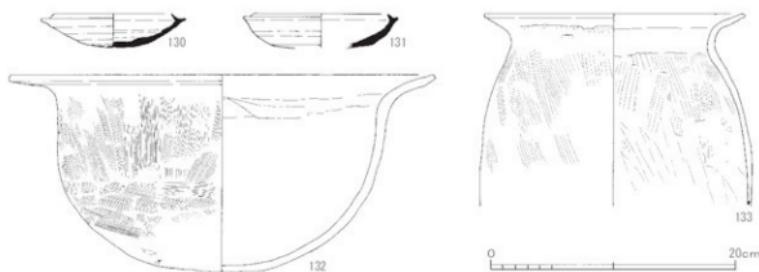


図69 I-3区土器群出土遺物実測図

I-3区土器群出土遺物

130・131は須恵器坏身で、130は、口径10.8cm、残高2.8cmを測り、131は、口径9.5cm、器高2.85cmを測る。132は土師器鍋で、口径34.4cm、器高16.3cmを測る。133は土師器甕で、口径21.0cm、残高15.8cmを測る。飛鳥時代のものと考えられる。

その他の包含層出土遺物

134～144は須恵器、145は土師器、146は製塙土器、147は飯蛸壺、148は砥石である。

134・135は坏蓋で、134は、口径14.2cmを測る。天井部外面に欠損部分につづくヘラ記号が残る。遺存部分では「×」字状を呈する。135は口径15.2cm、136・137は坏身で、136は口径9.35cm、器高3.25cmを測る。137は口径11.4cm、器高3.8cmを測る。138・139は坏で、138は口径10.6cm、器高3.05cmを測る。139は口径12.6cm、器高3.5cmを測る。140は高台の付く坏で、口径9.75cmを測る。141は2段透かしをもつ高坏脚部で、透かし孔は3方向から穿たれているものと考えられる。残高10.0cmを測る。142は甕口縁部で、口径28.5cm、143は壺で、口径11.1cmを測る。体部外面はタタキを施す。144は短頸壺で、口径7.2cm、底径7.1cm、器高7.8cmを測る。

145は塊で、口径11.8cm、器高5.1cmを測る。器壁が厚く、胎土も砂粒を多く含む。製塙土器の可能性も考えられる。146は製塙土器で、残高8.8cmを測る。体部外面はハケを施す。

147は土師質の飯蛸壺で、口径5.0cm、器高9.0cmを測る。外面に筋状の痕跡が残る。

148は砥石で、4面とも使用痕跡が残る。残存部分の幅3.7cm、長さ3.6cm、高さ2.5cmを測る。

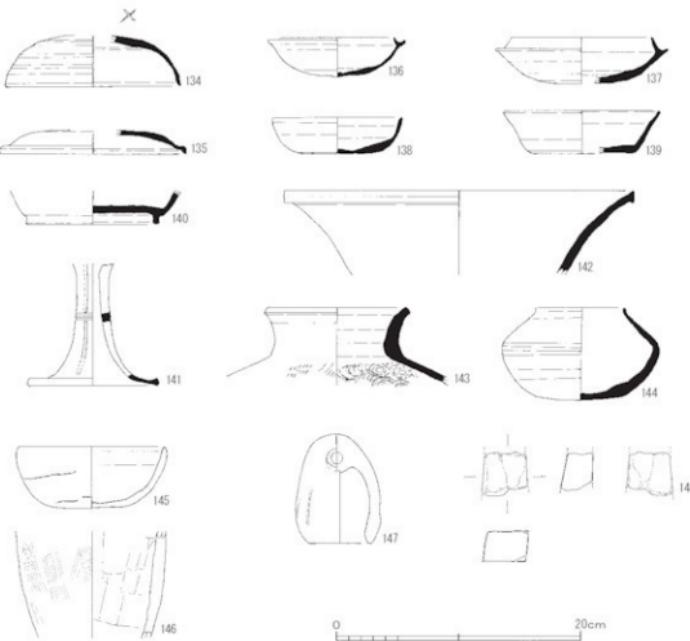


図70 第2包含層出土遺物実測図

第5節 第3遺構

I-5・II-1・III-2・3区にまたがる地区においては、第2遺構面の基盤層に弥生土器が多く含まれていた。弥生土器自体は他の地区においても出土しているが、それらは古墳時代以降の土器とともに混在するかたちで出土する傾向にあった。調査地南端中央に位置する当該地区においては純粋な遺物包含層として存在しており、第3包含層と呼称する。第3包含層の下層においてもう1面の遺構面を確認した。検出した遺構は、弥生時代中期の堅穴建物1棟である。

S B201

直径約9mを測る、平面形が円形を呈するものと考えられる堅穴建物である。西半部分肩部は上部の遺構などによる削平もあり不明瞭であった。深さは30cmを測る。内部で6基のビットを確認しているが、P1、P2、P4、P5が主柱穴と考えられ、4本柱の堅穴建物と考えられる。建物中央で中央土坑を検出している。

弥生時代中期の土器や石鐵、サヌカイト片が出土している。

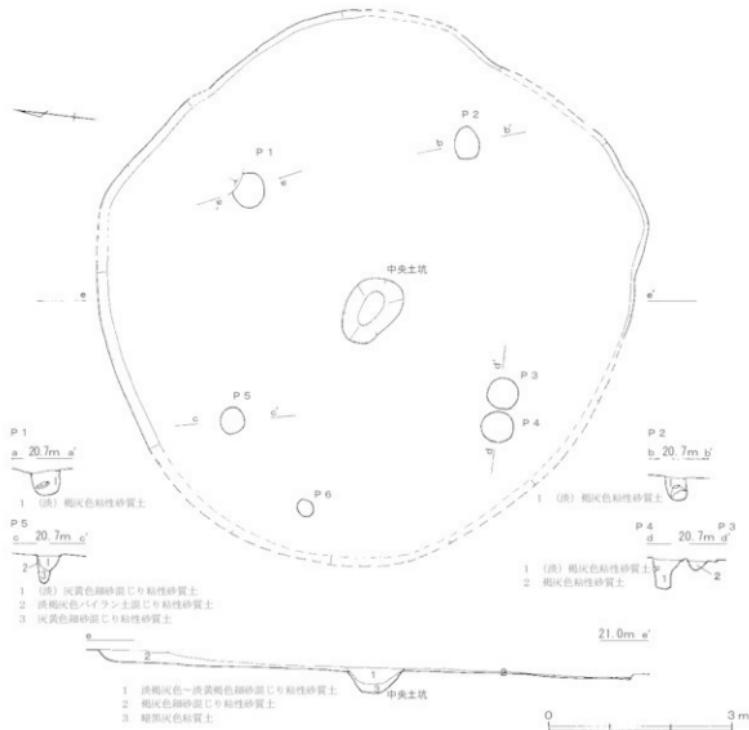


図71 S B201平・断面図

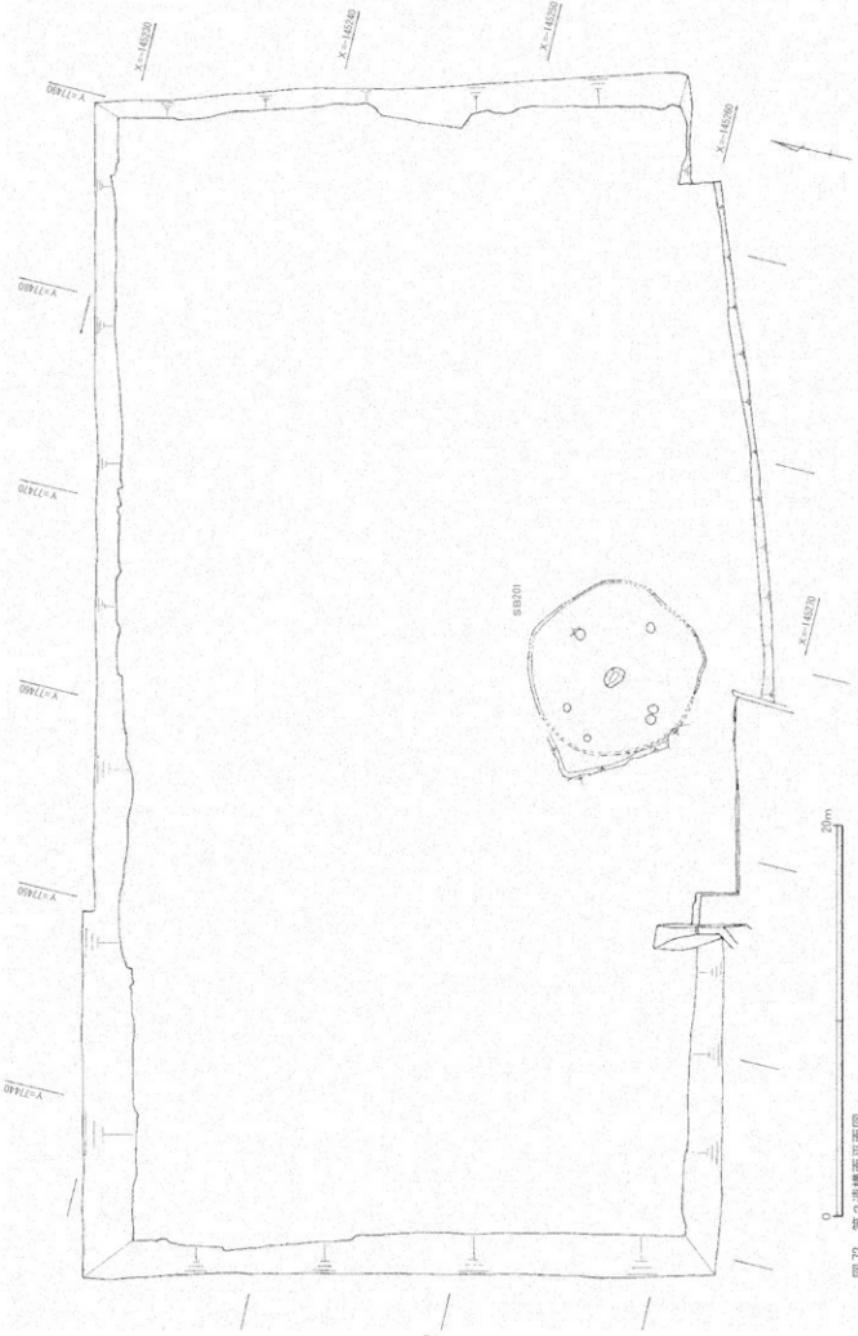


图72 第3道横面平面图

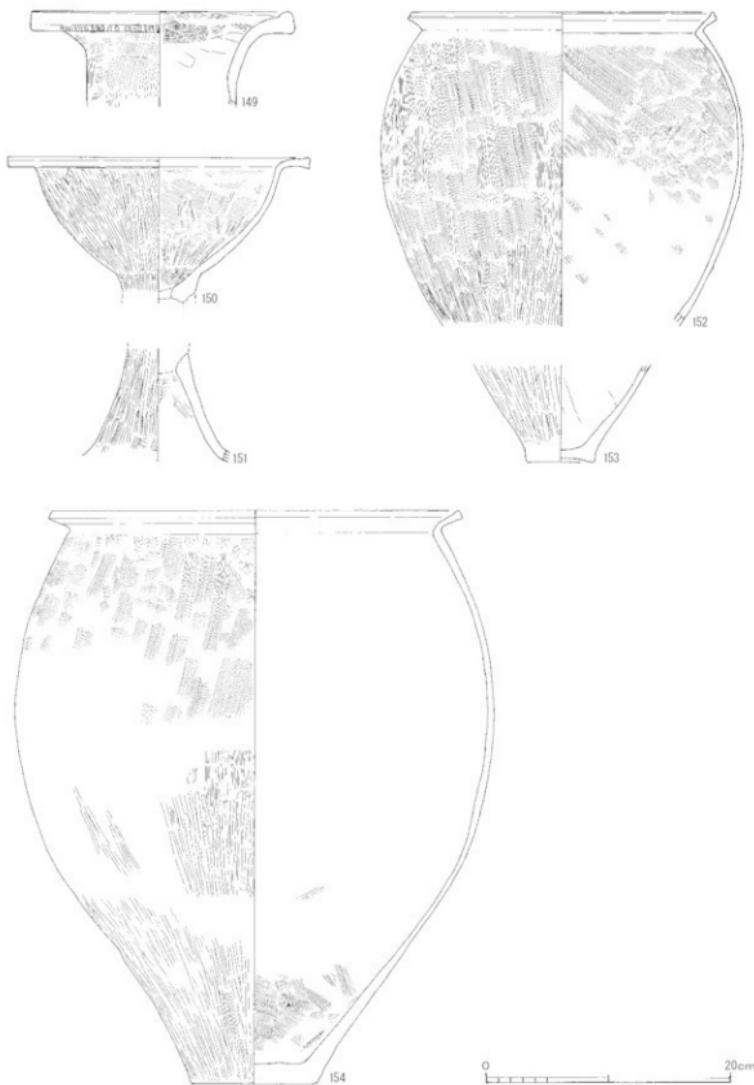


图73 SB201出土遗物实测图

中央土坑

長径1.2m、短径0.84m、深さ42cmを測る土坑で、下層に炭層に由来すると考えられる粘質土が堆積している。上層、下層ともに、サヌカイト片や炭片が多く出土しているが、特に下層に多い傾向が認められる。

出土遺物

6点を図化した。

149は広口壺で、建物南部中央付近、床面付近で口縁部を下にした状態で出土した。口径20.9cmを測る。口縁端部は上方にやや肥厚気味で、直立気味の幅広の端面をもつ。この端面の下端に刻目を施すが、磨耗のため遺存状況がやや悪い。遺存部の状況から判断すれば刻目は本来全周していたものと判断される。頸部外面はハケ調整、内面はハケあるいは板ナデの後頸部上部から口縁部にかけてヘラミガキを施す。

150・151は高杯で、胎土の状況や調整方法の共通性などから同一個体の可能性が高いが、接点がなく接合しないため別の個体として掲げる。

150は杯部で、P 1から出土している。水平気味に折り曲げた口縁部は直立気味の端面をもち、凹線状のヨコナデを施す。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整のうちヘラミガキを施す。深手の杯体部をもつ。口径24.4cm、残高11.9cmを測る。

151は脚部でP 4から出土している。外面はハケ調整の後ヘラミガキを施すが、部分的にハケの痕跡が残っている。内面はハケ調整の後下半部にはヨコナデを施す。

152は、主にP 2から出土した甕で、口径24.4cm、残高25.8cmを測る。口縁端部はやや上方につまみあげ気味におさめ、体部外面はハケ調整の後下半部はヘラミガキを施す。体部内面は斜め方向のハケ調整を施す。体部最大径はやや上位にもつ。

153は甕底部で、底径5.6cm、残高8.0cmを測る。外面はヘラミガキ、内面は板ナデを施す。

154大型の甕で、P 2から出土した底部と包含層出土土器片が接合したものである。体部最大径は中位より若干上位にもつ。体部外面はハケ調整の後下半部はヘラミガキを施す。内面の調整は磨耗もあり判然としないが、底部付近にはハケ調整の痕跡が残る。口径33.2cm、器高47.1cmを測る。

また、図化を行っていないが、文様をもつ壺体部片も数点出土している。

その他の遺物としては石鏸とサヌカイト片、結晶片岩片がある。

石鏸は、埋土中より2点(179、181)、中央土坑から1点(178)出土している(写真図版 27-2 参照)。

サヌカイト片は、埋土中より約120g、中央土坑中より約39g出土しており、叩石等は出土してはいないものの、少なくとも石器の加工を行っていたものと考えられる。

第3包含層出土遺物

前述のように、弥生時代中期の遺物包含層である第3包含層は、I-5区からII-1区、つまり今回の調査対象地の南端中央付近のごく限られた範囲において確認した。このため出土遺物量はあまり多くはないが、比較的遺存状態の良い大型の破片も一定量含まれている。また、石鏸も1点(180、写真図版27-2 参照)出土したほか、サヌカイト片も約68g出土している。第3包含層出土遺物のうち、6点を図化した。

155は、壺で頸部に櫛描き直線文を2単位施す。口縁端部は下方に若干肥厚する。頸部外面はハケ調整、内面はヘラミガキを施す。口径16.55cm、残高10.15cmを測る。

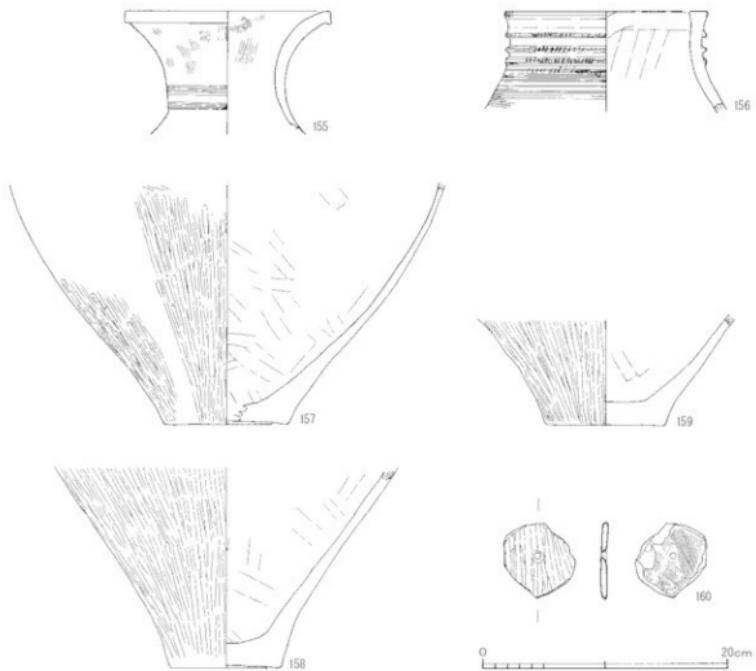


図74 第3包含層出土遺物実測図

156は、口頭部外面に刻目をもつ貼付突帯を3条施す直口壺で、突帯の下位には櫛描き直線文を施す。口径13.5cm、残高8.3cmを測る。

157～159は底部で、157は壺、158・159は甕であろう。ともに外面はヘラミガキ、内面は板ナデを施す。157は、底径10.0cm、残高19.7cm、158は、底径9.0cm、残高16.5cm、159は、底径9.7cm、残高9.1cmを、それぞれ測る。

160は土器片転用の紡錘車である。直径6cm前後を測る円形に粗く加工された土器片の中央に直径5mmの円孔を穿っている。外面にはヘラミガキ、内面にはハケ調整の痕跡が残る。

以上の第3包含層の遺物は弥生時代中期（II～III様式）のものと考えられる。

第6節 鉄製品・金属製品製作関連遺物

今回出土した金属関連遺物は、鉄製品16点に加え、鉈滓、鞴羽口など8点を数える。

鉄製品は、M1～M6、M10がいずれも断面方形の角釘で、M1、M2は頭巻釘である。それ以外は頭部を欠損するため、形状は不明である。

M8は鉄鎌と考えられるが、刃部上半を欠くため先端の形状は不明である。刃部は断面が平坦な方形を呈し、約3mmの段差を持つ間の下に幅4.1mmの茎が付く。残存長2.5cm、刃部幅1.1cm、同厚さ3.2mmである。

M11は刀子であり、切先と茎尻を欠損する。残存長は7.2cmで、刃部幅1.1cm、棟の厚み3.3mmである。あまり明瞭でない間を開けて、幅7.3mmの茎が付く。目釘孔は認められない。

M12～M16は板状品で、M12、M13はゆるく内湾する。この2点は鉄鍋等が推定できるが、その他について詳細は不明である。

M17～M20(写真図版28-3参照)は鉛滓で、楕形滓の一部と考えられる。またM22～M24(同)は輪羽口であり、残存状況の比較的良好なM23は、口径1.5cm前後である。またM21は不定形の焼土塊であるが、黒色に変色したやや内湾する平坦面を持ち、鋳型の可能性もある。これらは周辺での鍛冶もしくは鋳造作業が操業されていたことを示唆するものといえよう。

表2 鉄製品・金属製品製作関連遺物一覧

台帳番号	遺物名	出土遺構・層位	寸法(㎜)		
			長さ	幅(刃幅)	厚さ(底)
M1 R-159	頭巻釣	S.P31	62.9~	9.5	2.7
M2 R-374	頭巻釣	S.X91	39.9~	11.1~	3.4
M3 R-38	角釣	第1遺構面上面	39.6~	—	5.6
M4 R-117	角釣	第2包合層	36.6~	—	2.2
M5 R-43	角釣	灰蒸色砂質土	33.4~	—	3.4
M6 R-272	頭巻釣	S.K103 北平	29.7~	—	5.5
M7 R-112	棒状	第2包合層	19.9~	—	3.5
M8 R-280	鉄鎌	第2包合層	25.4~	11.4	3.2
M9 R-345	板状	第1包合層	30.9~	11.3	2.8
M10 R-36	角釣	第1遺構面上面	39.2~	—	5.7
M11 R-279	刀子	S.E01	72.91~	11.1	3.3
M12 R-130	容器	S.X103	75.1~	—	33.2~
M13 R-159	容器	S.P31	101.9~	—	15.2~
M14 R-28	板状	第1包合層	26.9~	13.2~	3.2
M15 R-516	板状	S.X108	29.3~	19.3~	1.7
M16 R-306	板状	S.X108	29.2~	18.1~	4.0
M17 R-369	楕形滓	S.X105 北平	28.3	62.1	11.4
M18 R-774	楕形滓	S.D109	68.2	46.5	20.4
M19 R-271	楕形滓	S.K103 砂出中	24.9~	26.8~	9.0
M20 R-210	楕形滓	第2包合層	38.4	34.3	28.4
M21 R-196	鋳型	S.P411	79.5~	56.6~	48.5~
M22 R-38	輪羽口	第1遺構面上面	18.5~	40.0~	15.6~
M23 R-210	輪羽口	第2包合層	36.9~	34.1~	14.6
M24 R-121	輪羽口	第2包合層	26.8~	17.2~	17.2~

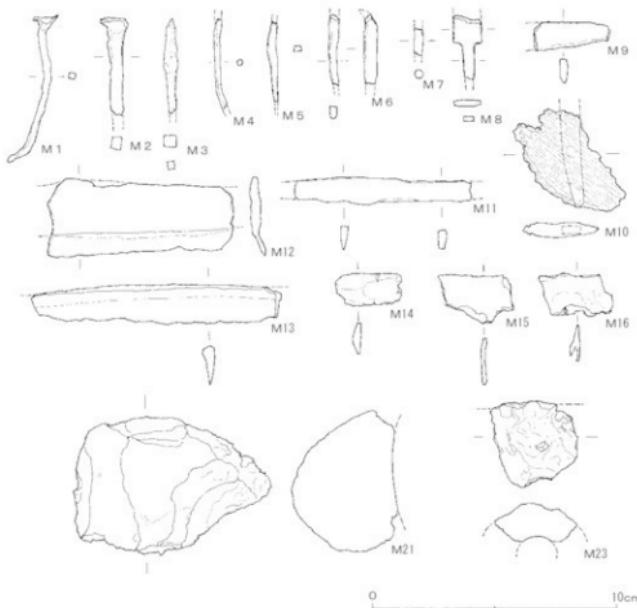


図75 鉄製品・金属製品製作関連遺物実測図

第4章　まとめ

今回の調査では調査区のほぼ全体で2面の遺構面を確認し、調査区南端付近の一部の地区でさらにもう1面の遺構面を確認した。

今回確認した遺構の時期は第1遺構面が中世、第2遺構面が古墳時代後期～奈良時代、第3遺構面が弥生時代中期に属するものと考えられる。

以下、これまであまり調査例がなく、遺跡の実態について不明な点が多い当遺跡について、今回の調査成果を振り返りながら考えてみたいと思う。

第1節　遺構

第1遺構面において確認された遺構はあまり多くなく、中世段階においては、当調査地は集落城の縁辺部分に属する可能性も考えられる。ただしI-3区で検出したS X04からは室町時代の遺物が多く出土しており、当該時期の集落城が当調査区の北あるいは北西側に広がっている可能性が考えられるようになったことは新たな調査成果といえよう。

第2遺構面では、堅穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、落ち込みなどの遺構を確認した。出土する遺物が少量かつ細片のため詳細な時期決定が困難な遺構もあるが、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代の遺構が混在しているものと考えられる。

堅穴建物およびカマド

今回の調査では、堅穴建物を確実なものとしては2棟、さらに調査区北部でも西側カマドと呼称したカマドを検出し、堅穴建物の一部を検出したといえよう。

S B101のカマドおよび西側カマドについては、堅穴建物の北辺(中央)にカマドを設置するという共通性(原則)が認められる。また両者の共通性としては、須恵器高壺を倒置して支脚として使用していることがあげられる。本例のように須恵器高壺を支脚として使用する類例としては、第3章第4節で触れたように、市内では西区に所在する吉田南遺跡第17次調査S B204において確認されている。当該調査では、TK23型式～TK47型式の時期において複数の堅穴建物が確認されているが、須恵器高壺を支脚として用いているのはS B204のみで、他は土師器高壺を用いているものが1棟と、カマド内に確実に支脚として用いられたものが遺存せずに、土師器の甕や高壺が出土しているのみのものがある。下山手遺跡周辺においては須恵器高壺を支脚として転用している例を聞かないが、当調査区内で2例を確認したことは、当地域の特徴である可能性も考えられ、今後周辺での調査の進展をまって再度検討すべき課題と考えられる。

堅穴建物から掘立柱建物への移行

今回の調査では掘立柱建物を数棟確認したほか、掘立柱建物を構成する可能性が高い柱穴を多数検出している。

掘立柱建物の柱穴から出土する遺物は小片が多く、詳細な時期を決定することは困難を伴うが、概ね古墳時代末ないしは飛鳥時代頃と考えられる。堅穴建物のうちS B103についても飛鳥時代頃の時期が想定され、堅穴建物から掘立柱建物への移行が飛鳥時代頃に行われたことを示すものと思われる。古墳時代後期の遺構については居住域を示す堅穴建物や掘立柱建物を検出しており、調査前に予想されていたように当該時期の集落が北側の地区にも広がっていることを確認できたことは当該時期の下山手遺跡の全体像を考える上で大きな成果といえよう。

溝・溝状落ち込み

今回の調査で検出した遺構のなかで注目されるものとしては溝ないし溝状の落ち込みがあげられる。SD105、106は全体像は不明ながら溝としての機能が認められそうであるが、その他の溝状の遺構、SD103、104などについては削平による影響もあるが両端が途切れているものが目立つ。これらは第3章でも述べたように、溝状の落ち込みとした方が妥当と考えられる。特にSD104は、完形の土器などがある程度埋没した段階ではあるが出土しており、何か特別な意味をもつ遺構と捉えられるのではないだろうか。SD104出土土器は他の遺構出土土器よりもやや古い時期の様相を示しており、埋土上層から出土していることを考慮すれば遺構が掘削された時期はさらに遡ることになる。先行する時期の遺構として注目すべきであろう。

さらに不確定要素も大きいが、飛鳥時代頃のものと考えられる井戸を調査区北端で検出していることから、当該期にはさらに北側にも集落域が広がっていたものと考えられる。飛鳥時代の掘立柱建物などの遺構については、当調査地の約西約300mに位置する下山手北遺跡でも7棟確認されている。同遺跡と当遺跡は現在山手幹線によって分断されているが、図4を参考にすれば旧地形の復元からは、とともに同様な標高の緩斜面上に立地しており、時期的に重なる部分があることは密接な関連が想定できる。

奈良時代の遺構を確認したことについては、確定できたものは少ないものの、調査前にはあまり予想されていなかったものであり、重要な成果である。今後の周辺地での発掘調査の進展によってさらに検討を加えたいが、近隣に古代山陽道が通っていたことが想定されている当調査の重要度がさらに増す可能性を含むものである。

第3遺構面で確認した弥生時代中期の遺構面は全く想定されていなかったものである。わずか100m²の範囲で確認できたのみであるが、弥生時代中期の竪穴建物1棟を検出したことは、当該時期において当調査地が確実に集落に含まれることを物語る貴重な成果となった。周辺での調査では、弥生時代後期の土器などが出土していたが遺構についてはあまり確認されておらず、また中期の遺構・遺物は皆無に等しいようである。今回の確認位置からすると弥生時代中期の遺構は、今回の調査地の南あるいは南西側に広がる可能性が高いと考えられるが、この地区についてはこれまであまり調査が実施されておらず、詳細については今後の調査にゆだねるほかない。今後さらに注意が必要である。

第2節 遺物

今回の調査では28リットル入りコンテナで約30箱以上の遺物が出土している。これらの出土遺物は弥生時代中期～後期、古墳時代～奈良時代、平安時代、室町時代のものである。

古墳時代の遺物ではSB101のカマド支脚に転用されていた須恵器高坏25が通常みられるタイプとは異なる脚裾部の形態を有している。類例の少ないタイプであり、産地の問題も含めて今後も検討する必要があろう。また、SB101及び西側カマドで確認した須恵器高坏2例は、SB101のものは脚部に、西側カマドのものは坏部に欠損部が認められる。カマド周辺からこれらの欠損部の破片が見つかっていないが、第3章でも触れたように、この欠損部が打ち欠きによるものか、そうであればそれはいつの段階で行われたものか、あるいは、使用中に欠損したか、その場合支脚に転用する前か後か、といった問題があり、現段階では確定するに至っていない。打ち欠きを肯定する場合、何か特別な意味を持っているものか、それともカマドで使用する際の安定性や火回りを考慮したことなのか、といった問題を含めて考える必要があろう。

須恵器の产地に関連するものでいえば、ヘラ記号を施すものや、色調に特徴があるものなどが少量ではあるが含まれており、今後も検討を深めたい。

また東西溝状落ち込みから出土した土師器甕120は平底気味の底部を有している。外面にハケを施すことや、平底鉢というよりは甕と呼べる器形からは直接的にはいえないものの韓式系軟質土器(中久保辰夫氏のいう定着型軟質土器)との関連も考慮すべきなのかもしれない。

製塩土器・漁撈具

今回の調査では、製塩土器や、飯蛸壺、土錘といった塩業や漁業に関連する遺物も出土している。当調査地から現在の海岸線までの直線距離は約800mであるが古墳時代ではもう少し近かったものと考えられる。そうした環境からすれば直接海へ出かけ、製塩や漁撈を行っていた可能性は十分考えられる。

製塩土器は、既に示した24や129、145のほか数点の破片があり、ほかにも砂粒を多く含む粗い胎土をもつ土器の中に製塩土器の可能性が考えられるものもあり、少量ではあるが製塩に携わっていた可能性を示している。

飯蛸壺はほぼ完形品の147のほかに数点の破片が出土している。どれほどの頻度かは不明であるが、完形に近いものが出土していることを考慮すれば飯蛸漁を行っていたことが考えられる。土錘は表3に掲げたように各遺構や各土層から出土している。詳細な時期決定を行えないものが多いが、逆に古墳時代以降室町時代に至るまでの各時代において漁撈活動を行っていたものと考えられる。ただし、全体の遺物量からすればわずかな量の出土であり、主たる生業活動であったとはいひがたい。土錘の内訳では全体を通して管状土錘と棒状土錘が多く、大人数で行う袋網(曳網)による漁が行われていたものと考えられる。一方有溝土錘は2点のみの出土であり、少人数でも行うことができる刺網や投網による漁はあまり行われていなかつたものと考えられる。

石器・サヌカイト

第3包含層や第3遺構面SB201を中心として、今回の調査ではサヌカイト片が多く出土(全体総出土重量:約390g)している。石器は古墳時代以降の遺構等に混入していたものを含めると、石鏃が5点出土しているほか楔形石器と考えられるものが少量出土している。石器やサヌカイトは古墳時代以降の遺構や土層からも出土しており、弥生時代の遺構や遺物包含層にとどまらない。弥生土器も純粹な遺物包含層の検出できたのは調査区南部のごく一部ではあるが、調査区内の各所で出土は確認しており、本来弥生時代中期の遺構や遺物包含層が今回確認できた以上に存在したことが十分考えられる。

表3 出出土錘一覧

	型式	種別	大きさ	件数	台帳番号
第一遺構面					
SB201	2	20		1	U-008, 011, 013, 017, 027, 028, 047, 048, 415, 746
SB202	1	6		1	U-008, 031, 042, 052, 060
SB203	2			1	U-013, 029
SB204	1			1	U-027
SB205	1			1	U-263
SB206	1			1	U-069
SB207	1			1	U-067
SB208	2			1	U-067
第二遺構面					
SB211	13	30	7	4	U-113, 117, 121, 131, 135, 136, 138, 143, 166, 172, 179, 180, 187, 195, 210, 215, 223, 285, 281, 442, 749, 750
SB212	2			1	U-254, 270, 278
SB213	3			1	U-196, 198, 209
SB214	1	4		1	U-202, 203, 204, 205
SB215	2			1	U-067
SB216	1	2		1	U-287, 406, 419
SB217	1	3		1	U-067
SB218	2			1	U-275, 313
SB219	1			1	U-063
SB220	1			1	U-275
SB221	1			1	U-303
SB222	1			1	U-279
SB223	1			1	U-299
SB224	1	2		1	U-272, 300
SB225	1			1	U-023
SB226	1			1	U-113, 116
SB227	1			1	U-062
SB228	2	6		1	U-307, 168, 219, 241, 500
SB229	1			1	U-460
SB230	1			1	U-069
SB231	1			1	U-309
SB232	1			1	U-407
SB233	1			1	U-069
SB234	1			1	U-069
SB235	1			1	U-069
SB236	1			1	U-069
SB237	1			1	U-069
SB238	1			1	U-069
SB239	1			1	U-069
SB240	1			1	U-069
SB241	2	2		1	U-204, 217, 238, 240, 428, 439, 432
第三遺構面					
SB242	2			1	U-061, 062, 072
SB243	1			1	U-063
SB244	1			1	U-106, 107, 110, 421, 620
SB245	1			1	U-753
SB246	1			1	U-174, 741
合計	27	103	2	3	

また、SB201からは中央土坑も含めて約160g出土しており、大型の剥片も含まれることから、加工具の出土はないものの、この建物内で石器の加工が行われていたことはほぼ確実であろう。今回石器加工を示す堅穴建物を確認したことは大きな成果といえよう。

以上のように、今回の調査では弥生時代中期以降、古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、室町時代と各時代にわたる集落の一端を確認できた。これらの中には調査前に予想できたものも含まれるが、多くは予想をはるかに超える貴重な成果である。当遺跡の全体像を明確にするためにはさらに周辺地での調査成果を待たねばならないが、今回の調査成果は、これまで詳細が不明であった当遺跡の様相を窺い知るうえで躍進的な成果をもたらしたといえよう。

参考文献

- 秋山浩三『近畿南部の煮炊具』『古代の土器研究一法律的土器様式の西・東4 煮炊具一』古代の土器研究会1996
新竹由美『摂津西部』『7世紀の土器(近畿西部編)』古代の土器研究会1998
池田征弘『摂津西部・播磨』『古代の土器4 煮炊具(近畿編)』古代の土器研究会1996
岡崎正雄・深井明比古『丁・梆ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会1985
岡田章一・長谷川謙『兵庫津遺跡出土の土製煮炊具』『研究紀要』第3号兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003
亀田修一『総説 古墳時代中・後期の土器』『考古資料大観』第3巻小学館2003
京嶋覚『古墳時代後半期における土師器の器種構成』『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書III』(財)大阪市文化財協会1992
京嶋覚『長原・瓜破遺跡の製塙土器』『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書IV』(財)大阪市文化財協会1992
京嶋覚『古墳時代後半期の土器の変遷』『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書V』(財)大阪市文化財協会1993
京嶋覚『難波宮下層』土器の再検討』『大阪市文化財論集』(財)大阪市文化財協会1994
口野博史『〈資料紹介〉一二宮神社保存土器一』『神戸市立博物館研究紀要』第26号神戸市立博物館2010
小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房2005
森宮正『弥生時代中期中頃から後半の土器』『玉津田中遺跡第一第六分冊一(総括編)』兵庫県教育委員会1996
森宮正『東播磨地域における弥生土器編年』『弥生土器の様式と編年一播磨編一』大手前大学史学研究所2007
杉井健『埴形土器の基礎的研究』『待兼山論叢』第28号1994
積山洋『塩業と漁業』『講座日本の考古学8 古墳時代(下)』㈱青木書店2012
丹治康明・西岡誠司『宅原遺跡(岡下地区)』『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1988
中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』1995
中居さやか編『古田南遺跡第17・18次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2006
中久保辰夫『古墳時代中期における韓式系軽質土器の受容過程』『考古学研究』第56巻第2号2009
中野咲『古墳時代における火焔について』『立命館大学考古学論集』V立命館大学考古学論集刊行会2010
日本中世土器研究会『東播系須恵器一編年と分布から考える一』日本中世土器研究会・大手前大学史学研究所2013
田辺昭三『須恵器大成』角川書店1981
広瀬和雄『近畿地方における土器製塙』『考古学ジャーナル』298号1988
富加見泰彦・山上雅弘編『陶邑・大庭寺遺跡II』大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会1990
南秀雄『難波宮下層遺跡の土器と集落』『難波宮址の研究第九』(財)大阪市文化財協会1992
宮崎泰史・藤永正明『年代のものさし-陶邑の須恵器』大阪府立近づ飛鳥博物館2006
山本三郎『兵庫県(播磨・摂津)』『日本土器製塙研究』青木書店1994
和田晴吾『弥生・古墳時代の漁具』『考古学論考』平凡社1982

写 真 図 版

写真図版 1



1. I・II区全景（空中写真）

写真図版 2



1. I 区第 1 遺構面全景（東から）



2. I 区西半部第 1 遺構面全景（東から）

写真図版 3



1. III-1・2区第1遺構面全景（北から）



2. 同左（南西から）



3. II-2区南西隅第1遺構面全景（南東から）



4. SK01 土層断面（西から）



5. SK02 土層断面（南から）



6. SK03 土層断面（南西から）

写真図版 4



1. SK04 土層断面（北西から）



2. SX01 土層断面（南西から）



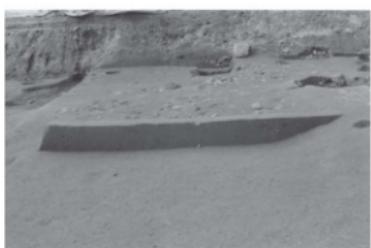
3. SX02 No. 1 Sec. 土層断面（南東から）



4. SX02 No. 2 Sec. 土層断面（南東から）



5. SX03 No. 3 Sec. 土層断面（南東から）



6. SX04 上層土層断面（北東から）

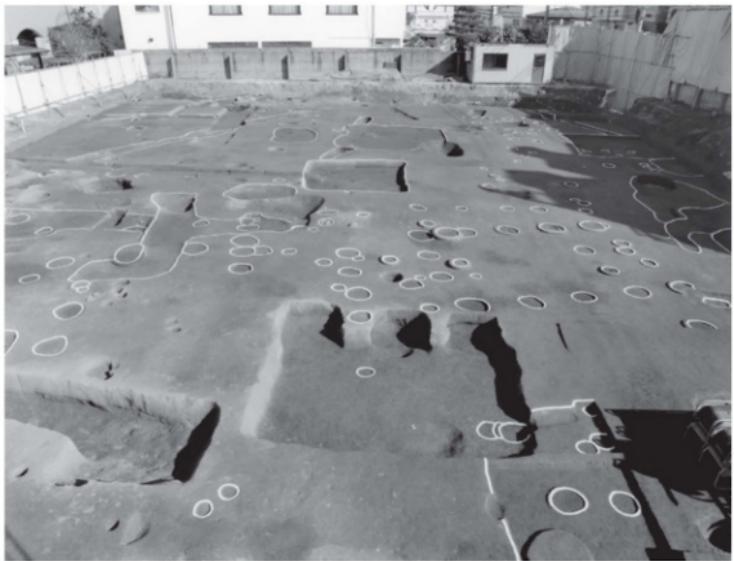


7. SX04 下層土層断面（東から）



8. SX06 土層断面（東から）

写真図版 5



1. I 区東半部第2遺構面全景（南西から）



2. I-3 区第2遺構面全景（東から）

写真図版 6



1. II-1区第2遺構面全景（北東から）



2. III-1～3区第2遺構面全景（北から）

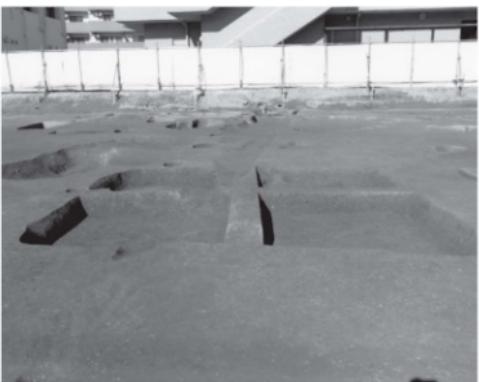
写真図版 7



1. SB101 全景
(南東から)



2. SB101 カマド全景
(南東から)



3. SB101 東西土層断面
(南東から)

写真図版 8



1. SB103 全景
(南東から)

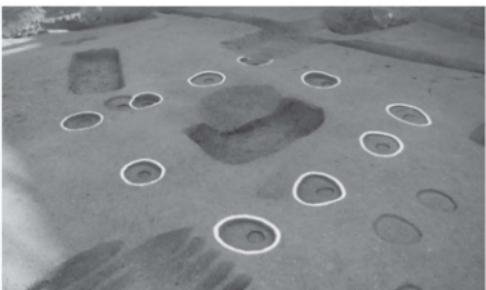


2. 西側カマド全景
(南東から)



3. 西側カマド東側土器群
検出状況
(南東から)

写真図版 9



1. SB111 全景
(西から)



2. SB112 全景
(南から)



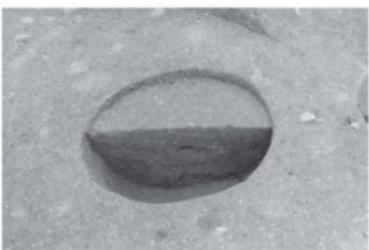
3. SB111-P 5 土層断面 (北西から)



4. SB111-P 6 土層断面 (南東から)

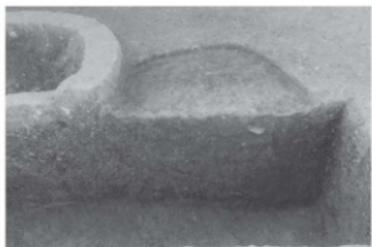


5. SB112-P 2 土層断面 (南西から)



6. SB112-P 12 土層断面 (西から)

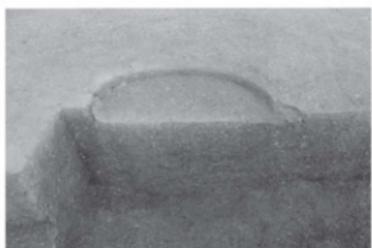
写真図版 10



1. S P160 [SB113] 土層断面（北から）



2. S P165 [SB113] 土層断面（北から）



3. S P184 [SB113] 土層断面（南から）



4. S P188 [SB113] 土層断面（南から）



5. S P288 [SB114] 土層断面（東から）



6. S P292 [SB114] 土層断面（東から）



7. S P301 土層断面（北西から）



8. S P302 土層断面（北西から）



1. I-1区 SD103 全景（東から）



2. I-4区 SD104 全景（南西から）



3. I-2区 SD105 全景（南東から）

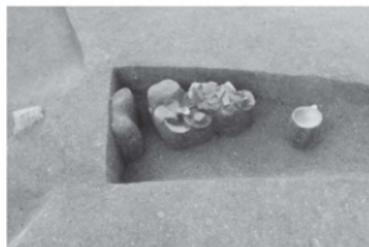


4. I-4区 SD106 全景（北から）

写真図版 12



1. SD 104(3)区遺物出土状況（北西から）



2. SD 104(4)区遺物出土状況（北から）



3. SE 01 土層断面【断割前】（南から）

4. SK 101 土層断面（東から）



5. SK 102 土層断面（南西から）

6. SK 103 土層断面（南東から）



7. SK 104 土層断面（南西から）

8. SK 105 土層断面（南東から）

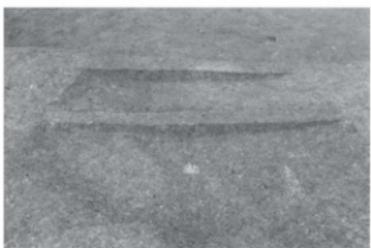
写真図版 13



1. SK 106 土層断面（南から）



2. SK 107 土層断面（南東から）



3. SK 108 土層断面（南東から）



4. SK 109 土層断面（南から）



5. SX 102 全景（南西から）



6. 同左粘土検出状況（南西から）



7. SX 102 土層断面（南西から）



8. 同左粘土内土層断面（北西から）

写真図版 14



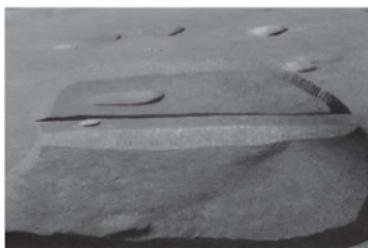
1. S X 103 土層断面（南東から）



2. S X 104 土層断面（南西から）



3. S X 105 土層断面（南西から）



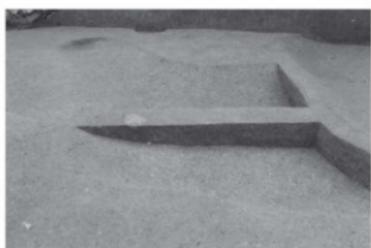
4. S X 106 土層断面（南西から）



5. S X 107 土層断面（南西から）



6. S X 108 No. 1 Sec. 土層断面（南西から）



7. S X 108 No. 2 Sec. 土層断面（北西から）



8. S X 109 土層断面（南西から）

写真図版 15



1. 東西溝状落ち込み No. 1 Sec. 土層断面（北東から）



2. 同左 No. 2 Sec. 土層断面（北東から）



3. I-2区第2道横面下層造構検出状況（南西から）



4. I-3区土器群検出状況（北から）

写真図版 16



1. SB201 全景（北東から）



2. 同上（北西から）



1. S B201 中央土坑

土層断面

(西から)



2. S B201 土層断面

(西から)



3. III-1・2区南壁

土層断面

(西から)

写真図版 18



22



23



25

1. 第1包含層出土遺物 [22・23]

2. SB101 カマド出土遺物 [25]



30



31



38



32



33

3. SB102 出土遺物 (1) [30~33]



39

4. SB102 出土遺物 (2) [38・39]

写真図版 19



1. S B102 出土遺物 (3) [35~37]



2. S B102 出土遺物 (集合)
[30~39]



3. 西側カマド出土遺物 [43]



4. 西側カマド東側土器群出土遺物 (1) [44~47]

写真図版 20



48



49



2. 西側カマド東側土器群出土遺物（集合）
〔44～49〕

1. 西側カマド東側土器群出土遺物（2）〔48・49〕



62

3. SD103 出土遺物（1）〔62〕



80

4. SD105 出土遺物〔80〕



63



61



60

5. SD103 出土遺物（2）〔60・61・63〕

写真図版 21



1. S D 104 出土遺物 [64・67・68・70・71・76～78]

写真図版 22



1. S D106 出土遺物 (1) [82]



3. S K105 出土遺物 [90]



2. S D106 出土遺物 (2) [83]



4. S X102 出土遺物 (1) [97]



5. S X102 出土遺物 (2) [91]



7. S X102 出土遺物 (4) [96]



6. S X102 出土遺物 (3) [93]



8. S X105 出土遺物 [105]

9. S X102 出土遺物 (集合) [91・93・96・97]



1. S X 110 出土遺物 [118]



3. 東西溝状落ち込み出土遺物 (1) [119]



2. S P 401 出土遺物 [127]



4. 東西溝状落ち込み出土遺物 (2) [120]



5. I-2区北西部落ち込み（整地層）出土遺物 [128]



6. I-3区土器群出土遺物
[130・132・133]

写真図版 24



1. 第2包含層出土遺物（集合）〔134・136～139・141・143・145〕



2. 第2包含層出土須恵器坏蓋〔134〕ヘラ記号



3. SB201出土遺物（1）〔149〕



5. SB201出土遺物（3）〔154〕



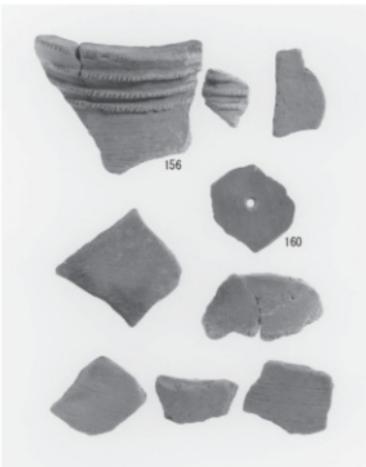
4. SB201出土遺物（2）〔153〕



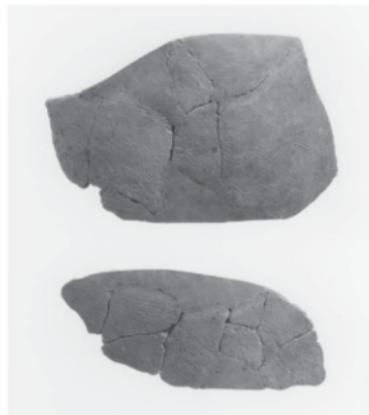
1. SB201 出土遺物 (4) [150]



2. SB201 出土遺物 (5) [152]



3. 第3包含層出土遺物 [155・156・158・160ほか]



写真図版 26



1. 第2包含層出土飯蛸壺 [147]



2. 第2包含層出土製塙土器 [145]



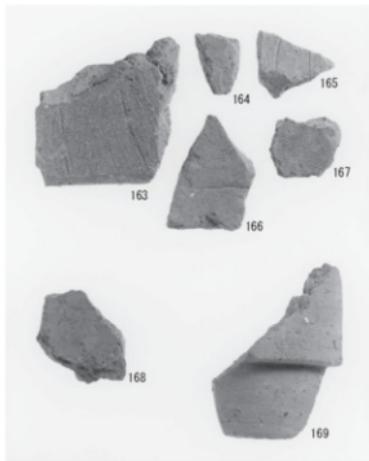
4. S X01・03~05 出土土錘 [5・22・161・162]



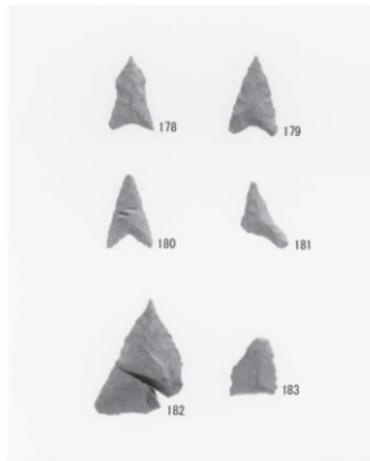
3. 出土製塙土器 [24・129ほか]



5. SB101・102 出土土錘 [29・40・170~177]



1. S X04・05・07 出土瓦 [163~169]



2. 出土石器 [178~183]

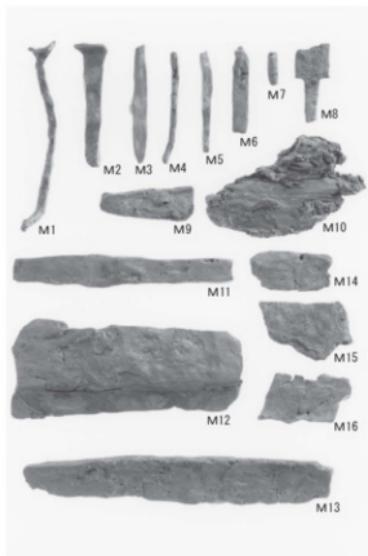


3. 第2包含層出土磁石 [148]

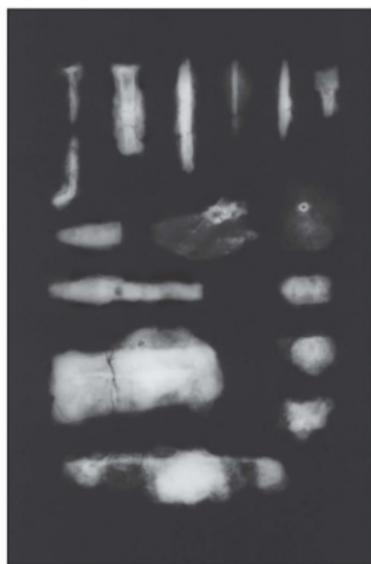


4. 土器底部 [55] 種実圧痕マクロ写真 (2倍)

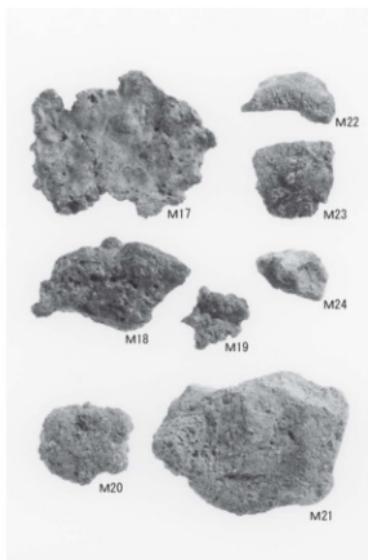
写真図版 28



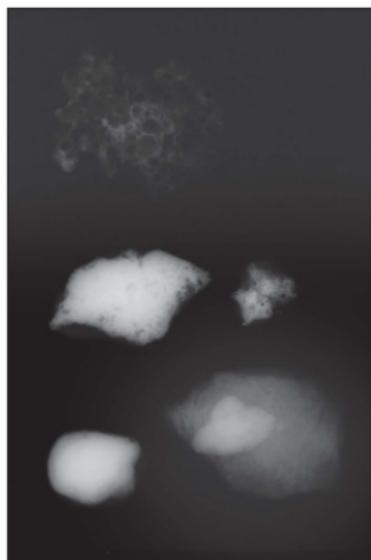
1. 出土鉄製品



2. 同左X線写真



3. 出土金属製品製作関連遺物



4. 同左X線写真

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しもやまでいせきだい6じはっくちょうさほうこくしょ							
書名	下山手遺跡第6次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	阿部敬生(編)・中村大介							
編者機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 Tel 078-322-5799							
発行年	西暦2014年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しもやまでいせき 下山手遺跡	ひょうごけんこうべし 兵庫県神戸市 中央区下山手通 7丁目1番2号	28110	3-42	34度 41分 16秒	135度 10分 44秒	2012.10.24～ 2013.3.04	1,950m ² 延べ4,000m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
下山手遺跡	集落跡	弥生時代～ 中世		竪穴建物・掘立柱建物・ 井戸・土坑・柱穴など				
要約								
3面の遺構面を検出し、弥生時代中期の竪穴建物1棟、古墳時代後期の竪穴建物1棟、カマド1基、飛鳥時代頃の竪穴建物1棟、掘立柱建物4棟、井戸1基、飛鳥時代～奈良時代の土坑1基、室町時代の落ち込みなどの遺構を確認した。古墳時代後期の竪穴建物では須恵器高壺を支脚に転用したカマドを確認している。								
弥生時代中期の竪穴建物からは石繩やサヌカイトが出土しており、石器加工を行っていた可能性が考えられる。								

下山手遺跡第6次発掘調査報告書

平成26年3月 印刷

平成26年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

Tel 078(322)5799

印刷 株式会社クレアチオ

神戸市中央区新港町8-2 新港貿易会館4階32

Tel 079(233)9080